

ハイスクールDXD 後方
さんの力で生きて行き
ます。

エタルガー

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

就職や進学を前に死んでしまった彼・ひろきは、死後、神から違う世界で大好きであったキャラクターの全てを転生特典として選び、新たな人生を謳歌する。

そんな物語をご覧ください。

本作は台本形式です。嫌いな方は遠慮ください。

目次

第1話	え?ここどこ?転生ですかー	1
	そーですかー。	1
第2話	とりあえず30年以上生きてみた。	6
第3話	停止教室のヴァンパイア編……	17
	えっ?もうそこまで進んでるの?	17
第4話	駒王町に到着。 ……やつと原作かあゝ。	25
第5話	三勢力和平会談…この日から歴史が変わる…なんつって!	33
第6話	襲撃ゝ俺も時止め味わったかだ	33
	なあ…	47
第7話	嫉妬の蛇vs聖人ゝ今日は合の手しない	55
第8話	白龍皇vs聖人ゝ第2ラウンド開始である	66
第9話	神の右席の復活ゝはてさてどうなることでしょうか	83
第10話	シトリゝ眷属指導中ゝ人に何かを教えるのは苦手	95

第1話 え?ここどこ?転生ですかーそーですかー。

ここは「死後の世界」あたり一面真っ白で何も無い世界。

その世界で一人ポツンと床に寝そべり寝ている本作の主人公ひろきは目を覚まそうとしていた。

ひ「う〜ん…うん?知らない天じよ…って言わせねーよ!?あぶねー危うくお決まりのセリフを言うことだったーってゆうかここどこ?」

ひろきが色々ツツコミどころが多いこと言っていると

?「ようやく目を覚ましましたか。」

ひ「え?」

振り向くとそこにいたのは金髪碧眼のメイド服を着た美女で

はたきや前掛けを持っており掃除の途中なのだとわかった。

その美女を見た途端ひろきは

ひ「あつ!貴方は!」

?「え?」

ひ「家政婦さん!」

家?「誰が家政婦ですか!誰が!」

とはたきでひろきを叩きまくりました。ですかひろきはあまり聞いていません。

ひ「いやあくまあ一度は行って見たいセリフだなと、ふと頭に浮かびまして。」

家政婦?は、ぜえーぜえーと、息を吐きながら落ち着きを取り戻した。

家?「まあいいでしょう。すいませんがあなたには、これから私の話を聞いてもらいます。」

ひ「家政婦さん!お茶入れてー!」

家?「話を聞けー!」

と先ほどよりも倍以上にひろきをはたきで叩きまくりました。

ひ「痛い!痛い!わかりました。話を聞きますから、はたくのやめてー!!」

家?「ぜえーぜえーぜえー、ふう。話を戻しますよ。」

ひ「はいもう十分堪能したので!」

家?「はあく(ため息)では言いません。私は神と呼ばれています。そしてここは死後の世界です。」

そして残念なことにはあなたは死んでしまいました。」

ひ「あつはいそこは覚えていきます。」

神「おや？珍しいですね。覚えていて平然としているのは大抵の人はトラウマ回避のために記憶が一部欠けているのですが、あなた特に珍しいですね。」

ひ「まあーよく覚えていきますよー就職か進学を考えて信号無視して車に撥ねられて死んだなんてちよつとないわーと思いましたし。」

神「まあとにかく貴方には私の管理する世界で転生をして欲しいのですが大丈夫でしょうか？」

ひ「あつ大丈夫ですよ。」

神「随分アツサリと決められましたね？」

ひ「まあー生前があんな人生じゃこつちも納得いつてないので次の人生ではちゃんと生きたいって考えてます。ちなみに

自分が行くのはどの世界ですか？」

神「あーはい私が管理しているのは“ハイスクールDXD”というライトノベルの世界です。」

ひ「あゝあのいろんな異種族が裏で住んでいる世界ですね。でも大丈夫かな？俺いきでいけるかな？」

神「もちろん丸腰では流石に可哀想なのでちゃんと転生特典つけさせてもらいます。」

ひ「それだったら」とある魔術の禁書目録”に登場する”後方のアックア”の力すべて欲しいです。」

神「わかりました。それでは聖人と聖母崇拜の力は限界なく効果出来るようしておきましょうか?」

ひ「はい。っていうか神様もとあるシリーズ知ってるんですね。」

神「まあー何冊か愛読してますね。 あつちよちよいのちよいつと!」

神様が安直な呪文を唱えているとひろきの足元が開きだした。

神「あと数分で転生できます。その前に少し話があります。」

ひ「どうしました?改まって」

神様は真剣な表情でひろきを見つめていた。

神「転生したら元の名前は名乗れず、後方のアックアの本名

”ウイリアム・オルウェル”となりの国籍も日本ではなくなりますがそれでも大丈夫ですか?」

とかなり真剣に転生後のひろきの人生を心配していたが、

ひ「大丈夫です!俺とあるの後方のアックアに憧れていたのでむしろアックアの人生を一度体験してみたいです!。」

神「……そうですか。ならもう心配は要りませんね。」

ひろきの足元がさらに光りだした

神「貴方の第2の人生に栄光あれ!!」　ポチッ!

と神様はいつのまにか持っていたボタンを押した

ひ「えっ?」　フォン!

とひろきの足元に穴が空き落ちて生きます。

ひ「ちよつと!?まじかーこつちの方がトラウマになるわー!!!」

と叫びながら落ちていきました。

神「これは最初に私をからかった罰です。それじゃーいつてらっしやーい!!」

こうしてひろきは第二の人生を謳歌するのです。

第2話 とりあえず30年以上生きてみた。

転生してから31年ほど経ち、ひろきことウイリアム・オルウエルは、裏の世界で後方のアックアとして色々活躍していた。

ア「あの日転生してから31年ほど経つが、まさか子供の頃からやばい人生送っているのであるな。アックアは」

なぜか口調も語尾も変わっているし、

…あつ！一応みんなに後方のアックアってどんな人か少し説明すると

とある魔術の禁書目録に登場するばり強いキャラで世界でも20人も満たない聖人という産まれた時から神の子とよく似た身体的特徴を持っており普通の人間の何倍も力を有しており並みの相手じゃ太刀打ち出来ない程に強い。

実際にハイスクールDxDの世界に来てアックアはもはや現代の英雄ではないかというほどの伝説や功績を挙げている。

これまで彼が挙げた伝説を年齢ごとに紹介していこうと思う。

0歳で普通の両親との間に産まれてその時から聖人として力に目覚めていた。ちなみにその力を見たら普通は恐れるだろうが、両親は結構そうだったことをあまり気にし

ないキャラだったようで心良く受け入れてくれた。

2歳でその噂を聞きつけた、この世界の三大勢力悪魔・天使・墮天使が

独断行動をし、何百年ぶりに現れた聖人である彼を勧誘または誘拐でもしようとして襲撃しようとしたら大木を引っこ抜いて振り回して三大勢力を半殺しでお帰り願った。

そのことを聞き三大勢力を代表して熾天使のガブリエルが謝罪をして来た。

5歳になると近くの山にはぐれ悪魔の上級・下級関係なく50体の団体が押し寄せて来たが、両親に買ってもらったメイスイで特攻。小1時間ではぐれ悪魔の団体を壊滅させ、ウイリアムは心の中でこう思った、

(やっぱメイスイっていいなー)と

10歳にもなると流星にこれ以上家族に迷惑はかけられないと独り立ちを決意し、生活に必要な物だけを詰めて、家を出ることにした。

両親に関しては罪滅ぼしと言って熾天使のガブリエルが信頼に足る天使達を常に交代ごとに護衛としてつかせてくれた。

この事に関しては、ウイリアムも感謝を述べた。

12歳になると独り立ちし独自に聖母崇拜の術式を完成させ

聖人と聖母、二つの属性を両立させ今まで以上に爆発的に力を行使し始めた。その折にガブリエルに恩を返すため3年ほど教会で働くことを決めた。

仕事は主に教会内での不正の調査や、はぐれ悪魔・はぐれ悪魔祓いの捕獲または討伐を任務としており、すでにウイリアムは凶暴な魔獣やSSランクのはぐれ悪魔を討伐するなどすでに教会に多大なる功績を挙げていた。

15歳になり、とんでもない大物の討伐に成功する事になる。その相手とは

その当時の二天龍・赤龍帝ドライグと白龍皇アルビオンの討伐である

なぜ二天龍を討伐できたのかは、理由があり、それは聖人としての力並びに霊装アスカロンの力を持って討伐できたとのこと。

すでにアスカロンを霊装として作ることは、考えていたので、14歳の頃には完成させていたようだ。

流石にこの吉報は、教会全体でてんやわんやで、熾天使達が降りてきて更にてんやわんやであったが、なんとか落ち着きを取り戻し、

ウイリアム・オルウエルに熾天使達自ら二つ名を与えることにした。

その二つ名は、後方のアツクアと、後方とは聖書の神ヤハウエを守護する方向を示しており、後方はガブリエルが守護しており、ウイリアムはガブリエルの代行として後方のアツクアという二つ名を与えられた。さらにこの日から、ウイリアム・オルウエルは

教会最強の騎士の称号をもらった。

余談ではあるが、この後すぐに二番目に強い神滅具の煌天雷獄の使い手デュリオ・ジェズアルドが見つかり二番目に強い騎士に降格した。

流石にちよつと悔しかったそうだ。

その後ローマ教皇の護衛に選ばれ、ヴァチカンのサン・ピエトロ大聖堂の一室を借り受け今もそこで暮らしている。

また余談ではあるがローマ教皇は、とあるシリーズのローマ教皇に性格も容姿もすごい似ていた。

その後15年間は、誰かを助けたり、誰かを守ったりの繰り返しを続け

24歳の頃はジャンヌダルクを信仰する過激派騎士団：オルレアン騎士団の殲滅にも尽力するなど快進撃は止まらず

26歳の頃ローマ教皇が発足した教会最高殲滅部隊“神の右席”のナンバー2に選ばれた。だからその部隊は諸事情により解散したのである。その不始末のためにアックアはこの世のために奮闘した。後に明るみになる“最強の人間”の筆頭格に選ばれている。

そんな現代の英雄である後方のアックことウィリアムは今現在、

兵士A 「うわぁー!!」

兵士B 「につ!逃げろー!!」

兵士C 「またヤツが来たー!!」

隊長 「くそっ!!撤退だー!!撤退ー!!!」

銃が飛び交い戦車や戦闘機が大地と空を埋める表の世界の紛争地帯、その場所で後方のアックアは聖人としての力を使っていた。

その後ろには逃げ遅れたであろう避難民の方々がおり、兵士達が逃げていくと皆我先にとアックアに感謝を込めてお礼を言っていた。

「ありがとうございます!ウィリアム様!!」

「何度も何度も助けていただきありがとうございます。」

「ういりあむさまー!ありがとう」

「本当にありがとうございます。あなた様には何度も我々の命を助けていたいて、何とお礼をしたら良いか。」

老若男女・子供問わずみんながウィリアムにお礼を言っていた。

ウ 「気にすることはないのである。私が助けたかったから助けた

それで十分なのである。皆も無事で何よりである。」

ウイリアムは気にした様子もなく、皆の無事に喜んでいた。すると

「大丈夫!? しつかりして!」

急に大きな声で誰かを心配するような大声に皆が声のする方向を振り向くと、

「いたいよ〜いたいよ〜」

足から血を流している小さな女の子を母親だと思ふ女性が必死に駆け寄る。

アックア「どうしたのであるか?」

母親「あつ! ウイリアム様! うちの娘が足から血を流していて」

アックア「少し見せてみるのである。」

ウイリアムは女の子の怪我の様子を見ると

アックア「おそらく流れ弾に当たったのだろう、弾は貫通してあるのですぐに治療をするのである。」

ウイリアムはポケットから医療キットを取り出し治療の準備を始める。

アックア「少し痛むであるが、我慢できるであるか?」

女の子「うん! 我慢する。だってウイリアム様わたし達のために戦ってくれたんだもん!」

アックア「わかった。」

その後、数分で治療は終わりウイリアムは、自家製の薬を女の子の母親に渡した。

アックア「1日に1回この薬草を混ぜた薬を塗れば一週間で治るであろう。」

女の子「うん！ありがとうーウイリアム様！」

母親「本当にありがとうございます。ウイリアム様。」

アックア「礼には及ばない、皆の分の薬もある擦り傷や切り傷にも効くから持っているのである。」

ウイリアムは他のみんなにも薬を提供した。

「ありがとうございます。ウイリアム様！」

「何から何まですいません。」

ウイリアムは時たまにこうして医療や薬草の乏しい場所に赴き

自身の知識や薬を提供しており、一部の地域では彼のことを賢者と呼び敬っている。

アックア「うん？来たか。」

「?どうかされました。」

突然のウイリアムの反応に他のみんなもどうしたのかと心配していると、

「やつと見つけたぞ、ウイリアム」

声のする方へ振り向いて見るとそこにいたのはウイリアムと同年くらいの子タクシードを綺麗に着こなした薄い金髪の男性でありその面構えは歴戦の騎士を思わせるほどの迫力を感じた。その男の後ろから黒い西洋の甲冑を装備している集団が何十人車

で引き連れていた。

アックア「来たか、騎士団長」

騎士団長「ああ、ようやつと探したぞ。なかなか許可が降りなくてな、

オホンツえー！皆さん我々はイギリス王室特別安全保護団体のものです。イギリス王室から皆さんの保護をしに来ました!!。」

彼の名は、イギリス王室特別安全保護団体のリーダー兼イギリス教会の騎士を務めている騎士団長である。

その騎士団長の言葉に避難民のみんなはこえを大にして喜びをあらわにしていた。

「やったあー!!」

「これで安心できるぞー!!」

「もう銃の音聞かなくて済むのー?!」

「ああもう大丈夫だぞ」

よかったーと皆心を落ち着かせていると、その避難民を乗せる車が何台もやって来た。

アックア「術式は万全であるか？」

騎士団長「ああ全員を乗せると人避けの術式が発動するようになってる」

アックア「すまない、いらぬ世話をかいた。」

騎士団長「気にするな、俺とお前の中だ。全員を乗せたら先に行け！」

騎士「はい、大丈夫ですか？」

騎士団長「少しこいつと話がある終わったらすぐに追いつく。」

騎士「わかりました。では、我々は先に行きます。」

騎士の一人が準備を進めていると

女の子「ウィリアム様!!」

アックア「うん?どうしたのであるか?」

先程怪我を治したい女の子がやって来てウィリアムは同じ目線になるよう片膝を下ろした。

女の子「あのねー!みんなー!!せーのっ!!!」

「「「「「ウィリアム様!!ありがとうー!!」「「「「「」

と避難民のみんなが車の窓から顔を出して皆一同にウィリアムに感謝の言葉を述べていた。その言葉を聞いたウィリアムは

アックア「ああ皆も元気だな!」

そして車は人避けの術式を発動しながらこの紛争地帯を抜けるのであった。

アックア「……………」

騎士団長「感動の場面で水を差すようで笑いが、そろそろこっちも終わらせるぞ。」
アツクア「うむ、そうであるな。」

と二人で後ろを振り向くと先程撤退していった過激派の隊長が倍以上の軍勢を率いて襲撃をして来たのである。

隊長「先程はよくもやってくれなあー！皆の者相手は2人だ数の暴力で押し切れー！！！！」

「！！！！」
「！！！！」
「！！！！」

あるものは銃をあるものは戦車があるものは戦闘機で2人の人間に向かって突っ込んで行く。

騎士団長「では、始めるか。」

騎士団長は、手にした西洋剣に赤茶色の粘土細工のようなものが塗り込まれ全体を覆うと更に全体に棘状の突起が発生しそれが治ると、

異様に刺々しく獣を思わせる巨大な大剣”フルンティング”に変化し、アツクア「そうであるな。」

ウイリアム・オルウエル、否この場では、後方のアツクアの面構えになり、自身の影から全長5メートルを超える巨大なメイスを取り出した。そして2人は

騎士団長「いくぞ！」

アックア「うむ。」
何千もの軍勢に突撃していった。

一時間後、その場に残ったのはボロボロにされている武器・戦車・戦闘機と半殺しに
されている過激派の軍勢であつた。

第3話 停止教室のヴァンパイア編……えっ? もうそこ まで進んでるの?

あの紛争から約半年、あの避難民達は無事紛争地帯を抜けて今は、国の保護下に入っている”表の教会”に身を置いている

今現在ウィリアムはヴァチカンのサン・ピエトロ大聖堂の自分の部屋にてある報告書を読んでいた。

そこに書かれている内容は”神の子を見張る者 《グリゴリ》の幹部コカビエルがカトリックとプロテスタントの教会を襲撃し聖剣エクスカリバー4本を盗み日本の都市である、現魔王の妹が管理している駒王町に襲来し、三大勢力の戦争をもう一度起こすというあまりにもとんでもない内容であった。それと同時にウィリアムはこの報告書を読んだ

アツクア(ああーーーーー!!!原作もうそこまで進んでのかーーーーー!!!この32年自分の人生や仕事や人助けのことしか考えてなくてすっかり忘れてたーーーーー!!!)

原作のことをすっかり忘れていたのだ。

その時自分の部屋のドアからノックの音がした。

アックア「!?、誰であるか?」

教皇「私だ。」

アックア「(ローマ教皇…)どうぞ。」

ドアを開け入って来たのは、このヴァチカン、サン・ピエトロ大聖堂の“表と裏”どちらの教皇も務めているローマ教皇ことマタイⅡリースである。

アックア「それでわざわざ御足労頂き感謝する。それで、なぜあなたがここに。」

教皇「お前に客人だ後方のアックアよ、話はこのここを出て歩きながら話そう。」

教皇はそう言つてウイリアムをある場所に連れ出す、それと同時にウイリアムも後方のアックアとしての雰囲気醸し出す。

ローマ教皇はその場所に行くため、歩きながら本題に入るのであった。

教皇「さきほどの報告書を読んだであろうが、墮天使の幹部コカビエルが我々の教会が保有する聖剣エクスカリバーを盗み極東の都市、駒王町の管理者をしている現魔王の妹のところへ赴き戦争の再開を望んでいた。その最中にコカビエルがこの世界の

トップシークレッツの

話をしてしまったのだ。」

アツクア「聖書の神ヤハウエはすでにこの世にいないという事であるな？」

教皇「そうだ我らの主は四大魔王と共に先の戦争で乱入して来た二天龍共々討ち死にしておられる。この事を知っているのは、世界中の勢力の極一部のものしか知らされていない。」

アツクア「それで私を呼んだのは、此度の騒動と関係しているのだからか。」

教皇「ああ、今回の一件で、三大勢力間で和平会談が此度日本の駒王町にて行われることが決定した。」

ウアツクア「それで私はその会談で天界側の使者の護衛として駒王町に行く事であるか。」

教皇「そうだ。そしてその御二方が礼拝堂でお待ちになっている。」

二人は礼拝堂のドアを開けてそこにいる方に目を向ける。

？「お久しぶりです。後方のアツクア。」

？「ウイリアム、お久しぶりなのです。」

そこにおられたのは、天界勢力・四大熾天使の二人

天使長ミカエルと同じく四大熾天使のガブリエルであった。

アツクア「久方ぶりに御二方にお会いできることを感謝するのである。」

ミカエル「ええ、また貴方が表の紛争地帯に顔を出していたことは騎士団長

から伺っております。なるべく裏のものが表の世界のものに関わってはいけないのですが、貴方は素直に聞いてはくれませんからねえ」

ガブリエル「そこがウイリアムのいいことなんですよーミカエル。」

ミカエルはウイリアムの行いに注意しようとするがこういう時のウイリアムは結構頑固な性格なので、無理とわかり溜息を吐いた。

逆にガブリエルはウイリアムに近寄り頭を撫でながらミカエルを宥めた。

アツクア「ガブリエル様自分も三十路なので頭を撫でるのは勘弁して頂きたいのであるが」

ガブリエル「私からしたら今も昔もウイリアムは変わらないのですよー」

アツクア「それでミカエル様、お隣の信徒は、コカビエル襲来の関係者であるか。」

ミカエル「ええ、イリナ。ウイリアムに挨拶を」

イリナ「ひやつ、ひゃい!」

イリナと呼ばれた栗毛色のツインテールを髪型をしたまだ十代後半と思しき女の子はウイリアムの前に立ち挨拶をした。

イ「お、お会いできて光栄です！後方のアックア様!!

私はこの度の和平会談でミカエル様の護衛として任務に当たる

紫藤イリナと申します。宜しくお願いします。」

イリナは、懇切丁寧に自己紹介をした。

アックア「紫藤?…トウジ殿の娘か?」

イリナ「えっ!?パパのことを知っているのですか?」

アックア「ああ、トウジ殿とは、任務を共にした中である。よく休憩時間になるとじぶんの娘の自慢話をよく聞かされていたのであるからな。」

イリナ「ええー!?もおパパったらウイリアム様なんて事してるのー!?もうパパには一言文句言っておかなくちゃ。」プンプン!

イリナのその怒りようにここにいるみんなが和んだ。

イリナ「あわわわ!?!、すみません!皆様の前で大変失礼を。」

アックア「いや気にすることではないのである。たまにはストレスを発散させることは悪いことではないのである。」

ミカエル「イリナ、落ち着きなさい。」

ガ「そうですよー。」

教皇「そろそろ話を戻しましょう。」

ミカエル「ええそうですね。この度の和平会談の結果次第で世界は大きく動くことになるでしょう。ですので二人には現地にてわたし達と共に行動してもらいますがよろしいですか?」

イリナ「はい!この任務必ず最後まで務めさせていただきます。」

ガブリエル「そしてウイリアムには私の護衛としても頑張っていたいただきます。」

アツクア「ええ貴方には恩があるゆえ期待に応えるだけの成果は望むのである。」

ガブリエル「ふふっ、期待しています。」

ミカエル「では、すみませんが日本に出発するのは、明日の朝にいたしますので、荷物などの準備をお願いします。私は和平のために悪魔側と堕天使側に贈り物をしなければならぬので、これで。」

ミカエルは必要事項を告げて光を発しその場から転移した。

ガブリエル「では私も一度天界に戻りますので、二人ともまた明日です。」

ガブリエルも光を発し天界へと帰還した。

教皇「というわけだ、二人には明日の朝にここヴァチカンから近い空港に向かつてもらう。また詳細などは、メールにて知らせる。」

アックア「わかつたのである。」ピロン

二人はたまにメールでやりとりすることもある。

その二人のやりとりを啞然とみていたイリナ。

イリナ「えっ?!?二人ともスマートフォン持つてるんですか!?!」

アックア「ああ、何かと便利であるからな、よければお前も持つているならメールア

ドレス交換でもするで…」

イリナ「ええー!?今持つてなくてまたいつかおねがいますー!」

イリナは準備もあるのといきなりの急展開に動揺しまくり礼拝堂のドアを勢いよく開けたまま走り出して言った。

アックア「人の話は最後まで聴くものであるぞ。」

教皇「まあ良いわでは明日からの任務頼むぞ。」

アックア「わかつてるのである。」

ウイリアムもとい後方のアックアも礼拝堂の”ドアをちゃんと閉めて”

出て行った。

教皇「頼んだぞ、現代の聖人の資質を兼ね備えている後方のアックアよ。」

朝の早朝6時に彼等はヴァチカンから近い空港である
フィウミチーノ空港にいた。

ミカエル「では行きましょうか。」

ガブリエル・アツクア・イリナ「ええ「ああ「はいっ!」」
彼等は目的地の日本へと旅立った。

第4話 駒王町に到着。 …やつと原作かあゝゝ。

飛行機に乗り、日本には、昼過ぎごろに着いた。

ミ「では、私とガブリエルとイリナは悪魔側に和平の証として聖剣アスカロンを赤龍帝に渡してくるため、グレモリー眷属の女王が住まいとしている神社に向かおうと思います。」

ウ「?、悪魔が神社に住んでるのであるか?」

ミ「ええ、この駒王町の管理をする際に使われなくなった神社を一時的に貸してもらっているそうです。」

ガ「その間にウイリアムは、この町を散策して、和平会談のに支障がないか観て周ってください。」

ウ「了解した。」

ミ「では、行きましょうか二人とも。」

ミカエルはガブリエルとイリナを連れ神社に向かった。

ひとり残ったウイリアムは

ウ「さて、まずは、どこから会談場所となる駒王町の近くから周ってみるか。」

ウイリアム・オルウェルは二時間ほど観て回り近くの公園で休憩をとっていた

ウ「なるほど、確かに駒王町は、さまざまなのが起こり一種の特異点のようになっているな。」

教会で読んだ資料によるとコカビエルを倒したのは現代の白龍皇であり、ひとつの町には、あまりにもイレギュラーが多いと後方のアックアは思った。

するとウイリアムは座っていたベンチから立ち、側に落ちていた小石を拾い林で覆われている箇所に向ける。

ウ「いつまで、覗き見をしているのであるか。」ドヒュン！

ウイリアムは、ひとつの木に向けて音速の速さで小石を投げつけた。

するとその木はぶつかった箇所から折れ、倒れる。

？「だああー!? あぶねえー! ったく見境なしかよ!？」

折れた木から現れた人物は着物を黒髪で前髪だけが金髪の本ツシユで鬚を生やしたいわゆるちよいワル親父のような男。

だがその男から発せられるオーラは、只者ではないとすぐにわかった。

ウ「成る程、貴殿が墮天使総督アザゼルであるか。」

ア「ほおー、流石は現代の聖人だ。すぐに俺の正体に気づくとはなあほんじやまあ改めて自己紹介するかあ。」

アザゼルと呼ばれた男はその背中から6対12枚の黒い翼を広げ己の名を言葉にする。

ア「俺の名はアザゼル。墮天使共の頭をやっている。

よろしく頼むぜ後方のアックア。」

ウイリアムは先ほど座っていたベンチに再び腰掛け、アザゼルもその隣に腰掛けた。

(おいおい……改めてこうして見ると隙がねえな。こいつの経歴を見たときは、マジかと思つたが改めてわかるぜえ、こいつにはそれを言わせるだけの凄みがあるってなあ。)

ウ「それでわざわざ墮天使の総督でもあるあなたが私に一体何のようであるか。」

ア「いや、もちろんこの駒王町に来てるのは、和平会談のために来てるが、偶然お前を町で見かけたなあ好奇心で尾行紛いなことしたのは悪かった。」

アザゼルは、素直にウイリアムに謝罪を述べた。

ウ「頭をあげてくれそれに、一組織のトップがそんな簡単に頭を下げるな、尾行には気づいていたが、敵意も殺意もなかったので放っておいたまでである。」

ア「いや、この謝罪は今更ながら昔のお前に対しての謝罪はでもあんだよ。お前がガ

キの頃、うちのバカ共が悪魔と天使の奴らと組んでお前を捕まえて親まで人質にしようとした、あの時のことを今ここで謝らせてくれ。すまなかつた。」

ウ「……………」

ウイリアムは、初めて会ったこの男の謝罪には心から誠意を感じ、自分はどのような言葉をかけていいか、考えていた。

ウ「わたしは聖人だ。いずれ裏の世界に足を踏み入れることは覚悟していた、確かに子供の頃にすぐに裏の存在と初対面したときは、心臓がいつも以上に脈を打った、すぐにこの場から逃げ出したいと。だが、それ以上に私は両親を守りたいという気持ちの方が優先された。」

こんな自分を受け入れて面倒を見てくれた両親を守りたいと、
気づけば私は大木を振り回し三種族を全員半殺しにしていた。」

ア（あつ、その話はマジなんだな…）」

アザゼルは、若干冷や汗を掻いていた。

ウ「故に私はあなたの謝罪を受け入れよう。過去のことを悔いていてもしょうがない、あの時のことがなくてもいずれそうなっていたのであるからな、」

ア「そうか、ありがとよ。」

ウ「それにその時の騒動ににガブリエル様が代表で謝罪をして来たからな偉い方に

謝罪を貰うのは、あなたで3度目だ。」

ア「ふつ、アツハツハハツハツ!!お前さん今まで見てきた聖人とは、まるで違うなやっぱり今の時代は面白い!てなあ。」

ウ「ふふつ、そうであるな。」

アザゼルとウイリアムは、お互いに笑い合った。

知らない人が見れば、いい年した大人同士が昼過ぎから仕事もしないで談議している光景である。

ウ（うん…なにやらバカにされたようであるが、まあ良いであるか）

ア「それにしても、アツクア。気づいているか。」

ウ「ああ、何者かに見られていることであるな。」

今二人は誰かに見られている。それも殺気をまとつていることも。

ウ「……………。!?!、そこであるか!」サツ

ウイリアムは左の手のひらその方向に向けて公園の噴水の水が不可思議な行動をとりウイリアムが手を向けた方に水が一齐に押し寄せた

敵「もがおごおぶかぶく!!?!?」

その敵は突然の水の攻撃を受け頭からつま先まで全て浸かり溺れかけていた。

ウ「何者であるか?」

敵「ぶはあ!! ぜえぜえ!?! 誰が言うか!」

ウイリアムは水の境界を顔だけ解除し、拘束している敵に質問をしたが、その敵は、頑なに拒否をした。

ア「おい、今のうちに目的を話した方がいいと思うぞ。こいつを知らずに襲おうとしたわけじゃねえだろ。」

そう、自惚れではないが自分を知らずに襲う輩はいない、大抵の奴は、自分を倒して名を挙げる奴か、恨みからの奴が多いからだ。

ウ「ならば質問を変えよう。お前の所属する組織は…、」

敵「だから!! 言うわけねえつつてんだろ!! この…」ザパー!!

とウイリアムは、もう一度水を全身に浴びさせその敵を水状のシャボン玉のようにし覆った。敵はまた空気がなくなつたともがき苦しむ。

ウ「人の話は最後まで聴くものであるが…:聞こえてはいないな。」

ア「あーおいそれくらいで勘弁してやらないか、流石に溺れ死ぬぞ。」

後お前結構容赦ないなあ。」

ウイリアムはシャボン玉を解除し、敵を解放する。そいつは水をかなり飲んだのか、嘔吐していた。

ウ「質問に答える気になつたのであるか?」

敵「わがった、わがったからもう勘弁してくれ。」

敵を落ち着くまで待つウイリアム。こういう所は紳士である。

敵「俺が所属する組織は、カオス!!?!!」

するとその敵は魔法陣に包まれその身を炎が包んだ、

敵「アアーーーーー!!!」

敵は悲鳴をあげ骨も残らず焼け死んだ。

ウ「……………これはもしかしくとも、」

ア「ああ、口封じだな失敗した奴には容赦なしかおつかねえなあ。」

ウ「アザゼル殿、私の勘がだ明日に行われる和平会談、襲撃があるかもしれない。」

ア「なるほどなあ、俺たち三大勢力が手を組むのを納得いかないって奴らは、確かにいるかもなあ。」

アザゼルは確信めいたかのように質問を返した。

ウ「アザゼル殿は、何か知っているのであるか。」

ア「それも含めて、明日の和平会談の時に話すわ。少し戻って対策を講じなきゃならねえからな。」

ウ「わかった。此方はミカエル様やガブリエル様に報告しておくが良いであるか。」

ア「ああ、そーしてくれこつちもサーゼクス達に今起きたことを報告しとくわ、そん

じゃあ、後方のアックアイやウイリアム・オルウェル明日はよろしく頼むぜ。」

アザゼルは、自身の羽を広げて帰っていった。

ウ「さて、取り敢えずホテルに戻るであるか。」

ウイリアムは、自分たちが予約したホテルに戻っていった。

そして明日の深夜に三大勢力の今後を決める和平会談が行われるのであった。

第5話 三勢力和平会談……この日から歴史が変わる……な んつつて！

ついにやって来た三大勢力による和平会談。

その会談場所は、駒王学園の本校舎会議室にて行われることになった。

今現在駒王学園を覆っている結界の周辺には、悪魔・天使・墮天使が

それぞれ別れて会談を警護していた。だか、その表情からは、よい雰囲気は感じない。もし失敗したら、いつでもここが戦場になるという

予感を感じていた。

ミカエル「会議室には、現ルシファアのサーゼクスと現レヴィアタンのセラフオルーが先に到着しているそうです。」

ガブリエル「私達も早く行きましょう。」

会議室の扉を開けると、すでに円卓状の机の一角に椅子に悪魔側の代表である二人と給仕を務める悪魔が一人おられた。

サーゼクス「やあ、ミカエル。それにガブリエルも久しぶりだね。」

セラフオルー「やつほー！ミカエルちゃんもガブリエルちゃんもおひさー！。」

この二人こそ冥界を納めている四大魔王の二人

紅髪的美青年の名前がサーゼクス・ルシファー黒髪をツインテールにしている美少女がセラフォル・レヴィアタンである。そして給仕を務めているのがルシファー眷属の女王であるグレイフィア・ルキフグスである。

ミカエル「ええ、お久しぶりですねサーゼクス。」

ガブリエル「久しぶりですねセラフォル。それにグレイフィアも。」

グレイフィア「お久しぶりに御座います。ミカエル様。ガブリエル様。」

サーゼクスやセラフォルはまるで親友のように二人に挨拶し、グレイフィアの挨拶はその一つ一つが礼節を持った対応であった。

サーゼクス「そちらの二人が今回の事件関係者と噂の聖人かね？」

ミカエル「ええ、二人ともご挨拶を。」

イリナ「は、はい!!」

アツクア「うむ。」

イリナはガチガチに緊張した声で返事をしたので声が裏返った。一方ウイリアムは、イリナと正反対で全く緊張の色は見えていなかった。

だが内心は

アックア（うおおー！）、諏訪部ボイスと清水ボイスキター！

この出会いを転生させてくれた神にマジ感謝！

実は彼はこういう声優ネタが大好きなのであった。では気を取り直し

時を戻そう。（松〇時風）

イリナ「し、紫藤イリナと申します！本日はミカエル様の護衛としてこの任を受けてます！よろしくお願ひします！」

サーゼクス「はははっ！元気な子だねよろしく紫藤イリナさん。そして君が」

アックア「お初にお目にかかる現魔王サーゼクス・ルシファー殿、セラフォル・レヴィアタン殿。私は後方のアックア。今は任務中であるゆえこの場では私の事はそう呼んで欲しい。」

サーゼクス「成る程、その内に秘めている力。君は過去の聖人達の中でも群を抜いて強いね。」

アックア「いえ、私など聖ペトロや聖ヨハネに比べればまだまだであるので」

サーゼクス「比べる対象が豪華すぎるけど、それにそんなに畏まらなくてもいいよ、もしプライベートでは、私やセラフォルの事は好きに呼んでくれていいからね。」

セラフオルー「そうだよー! それに私的にも君とは友好的な関係でいたいし☆」

アックア「……………。考えておくのである。」

アックアは二人にここまでアタック気味に來たので少し照れていた。

今まで聖人としての面しか見られなかったので、このような対応は両親以外に慣れていないのだ。

アザゼル「なんだよー、俺たちが最後か。ついてねえーな。」

再び扉が開き、そこから墮天使の総督であるアザゼルと銀髪のイケメンが登場した。

恐らく彼が護衛なのだろうと同時に彼から懐かしい気配を感じた。

アザゼル「おー、ウイリアム。昨日ぶりだなあ」

アックア「アザゼル総督。今はあくまで仕事なのでアックアと呼んで欲しいのであるが。」

アザゼル「気にすんなよー。まっ、そういつてもお前が気にするんだろうな

わあつたよ、そんじやアックア、これでいいか。」

アックア「まあ、良いであるが。」ガシッ!!

二人が話していると不意にアックアの肩を誰かが掴み振り返ると其処には目が笑っていないガブリエルがいた。

ガブリエル「アックア。いえウイリアム。昨日アザゼルに会っていたのですか? なん

でちゃんと言ってくれなかったのですか？」

アックア「それは……」俺に会っていたのは黙ってるよ」とアザゼル総督に言われ。」

アザゼル「おいっ?!?!?でまかせてゆうか嘘言うんじやねえーよ?!」

アックアは珍しくアザゼルに罪をなすりつけた、内心これから始まることを楽しみにしていたので、

ガブリエル「アザゼル、そうなのですか？」

アザゼル「おいおい！違うってガブリエル。おいアックア!!ほんとの事言いやがれ！」

アックア「すまない。冗談である。」

アックアは十分楽しんだので、ガブリエルに本当のことを話す。

ガブリエル「そうなのですか。次からは気をつけてくださいね。」

アックア「わかったのである。」

ガブリエル「でも、帰ったらもう一回説教しますのでよろしいですね。」ゴゴゴゴゴウイリアム「はい。」

アックアは帰ったら覚悟を決めよと思った。

一瞬だけウイリアムに戻った。

アザゼル「おい、俺には一声かけることないのかよ。」

? 「フツフツ、かの聖人も熾天使の前じゃ形無しだな。」

すると今まで無言を決め込んでいた。銀髪の青年が喋りながらこちらに近づいてきた。」

ヴァーリ「俺の名はヴァーリ。今代の白龍皇だ。よろしく頼む。」

? 《久しぶりだな聖人よ。》

ヴァーリは自身の神器、13種ある神滅具の一つ白龍皇の光翼を展開し、同時にその光翼が輝きながら喋り出した。その声にはどこか威厳に満ちていた。その正体は神器の中に封じられているドラゴンの1体

二天龍・白龍皇アルビオンである。

アックア「久しいであるな白龍皇アルビオンよ。」

アルビオン《ああ久しぶりだな。それにしても貴様、この10年以上でまた強くなっているな。》

ヴァーリ「俺としては、出来るなら今からでもお前と戦いたいがアルビオンがどうしてもダメだと言うんだ。」

アルビオン《ヴァーリよ、何度も言うがまだ時期が早い。お前があのを完全に制御出来れば勝機はあると思うがな。》

アルビオンの言うあの力とは覇龍化だとアツクアは直ぐに理解できた。

アザゼル「おいおいヴァーリ、今から会談を始めるつてのにそんな闘争心剥き出しにすんなよ。いいからこっちに立ってろ。」

アザゼルは戦鬪狂のヴァーリを落ち着かせ自分側に戻ってこいと言葉を投げかける。

ヴァーリ「そうだな、今日はやめておこう。だがいつか手合わせ願う。」

アツクア「貴様が覇龍化を完璧なものとしたら、考えてやってもいい。」

ヴァーリ「ああ、ありがとう。」

ヴァーリはその言葉に満足したのかアザゼルの隣に戻った。

？「失礼します。」

再び扉が開き、そこから入ってきたのは悪魔であった。黒髪を肩まで切り揃え、赤い縁のメガネを掛けた知的な美少女であった。その子が自分の眷属を引き連れてやってきた。

セラフォル「あぁー！、ソーナちゃん☆！やっとなんて来てくれたー。もうおねーちゃん早くソーナちゃん成分を吸収したいから抱きしめさせてー!!。」

ソーナ「ちよつと、やめてくださいお姉様！公衆の面前でなにをやってるんですか、ちよつと離れてください！」

セラフォルは、お姉様と呼んだ子に抱きついていていた。

このメガネの女の子はソーナ・シトリー。今抱きついているセラフォルーの妹なのである。何故名字が違うのかは、今の魔王は役職であり、セラフォルーの本当の名字はシトリーである。

ソーナ・シトリーの後ろにいる眷属たちは皆苦笑いを浮かべていた。

ソーナ「とにかく一旦離れてください!!」

セラフォルー「えー!?まだ1パーセントも補充してないよーソーナたん!」

ソーナ「だからたん付けはやめてください!あと10パーセント位はもらっているでしょう。」

サーゼクス「こちらからセラフォルー。もうその辺にしておきなさい、今の自分は魔王としてここにいるのだから。」

セラフォルー「むうう!わかったよサーゼクスちゃんまた後でねソーナちゃん」

セラフォルーは抱きつくのをやめ、席に座った。ソーナは、ぜえぜえと汗をかいていたので深呼吸をした。

? 「失礼します。」

グレモリー眷属視点

おつす！俺、兵藤一誠。ひよんなことから裏の世界に巻き込まれてしまった高校2年生で、俺の中には神器の中でも13種ある神滅具の1つ赤龍帝の籠手を持っていて、この中に封じられているのは、二天龍の1体赤龍帝ドライブって言う昔三大勢力を相手に戦ったドラゴンがいるんだ。

祐斗「イツセーくん。一体誰にしゃべっているんだい？。」

一誠「なんか言わなくちゃいけないと思ってよ、あんま気にすんなよ木場。」

今俺に話しかけて来たのは、部長の眷属で騎士の木場祐斗。

ついこないだコカビエルとの戦いで禁手化、双覇の聖魔剣という新しい力を手に入れた仲間だけど俺としてはいけすかなあーイケメンなんだよ！あれ？俺褒めてんのかなしてんのどっちだ。

リアス「ほらイツセー。早くこっちに来なさい。」

一誠「あつ！はいっ！すいません部長。」

この人は、俺の主で上級悪魔のリアス・グレモリー様だ。

俺の通っている駒王学園の3年生で同い年のグレモリー眷属の女王の姫島朱乃さんと一緒に行動している事が多いので学園の二大お姉様と呼ばれている。

リアス「多分私たちが最後のようね、いいみんな決して失礼のないように」

皆一同『はいっ!部長!』

リアス「うん!いい返事!」

部長は俺たち笑顔で返してくれた。ああーいやされる〜。

アーシア「イツセイさん!また顔がにやけてますよ。」

一誠「ハツ!?!。悪りいアーシア。」

同じ眷属の僧侶のアーシアに注意された。いけねいけねっ

リアス「失礼します。」

部長に続いて俺たちも扉を潜りそこには、もうすでに魔王様方、さらに天使ミカエル様や墮天使のアザゼルが座っていた。

サーゼクス「私の妹とその眷属たちだ。報告はもらっているだろうか?」

ミカエル「ええ、読ませてもらいました。その件はありがとうございます。」

ミカエル様は俺たちに向けて感謝しながら頭を下げてくれた。

アザゼル「悪かったなあ、ウチのコカピエルが迷惑をかけたなあ。」

逆にアザゼルは、椅子に頬杖をつきながら適当に謝罪して来た。

その態度は、どうなのかと俺たちは皆思った。

サーゼクス「さてと、それでは会議を始める前に此処にいる者たちは全員、最重要秘密事項である”神の不在”を認知しているものとする。」

異論のあるものはいるかな?。」

サーゼクス様の言葉に皆誰も口を挟もうとはしなかった。

サーゼクス「よろしい、では早速会議を執り行なおう。」

そして三大勢力のトップによる会談が始まった。

リアス「…です。以上が私、リアス・グレモリーとその眷属が関与した事件の全容です。」

ソーナ「同じく、私、ソーナ・シトリーも彼女の説明に嘘偽りがないことをここに証明します。」

サーゼクス「ご苦勞、下がって来ていいよ。」

セラフォル「ありがとう!。リアスちゃん、ソーナちゃん。」

ソーナ「///、ゴホン。」

リアスとソーナによる事件の説明が終わり、サーゼクスが席に戻るよう促すと、セラフォルがまた妹をちゃん付けて呼んだのでソーナは、「だから!」と言いたげだったが、場所を考え心の内にとどめた。

サーゼクス「さてアザゼル。今回の件墮天使総督である君の意見を聞きたい。」

アザゼル「意見も何も、コカビエルのやつが独断でやったことだよ。だから白龍皇に頼んで最悪の事態を回避するために裏で動いてもらってたんだよ。今は冥府のコ

キュートスに永久冷凍の刑に処されるからな。」

サーゼクス「コカビエルが戦争を起こそうしていた事は、自分は関係ない?。」

アザゼル「ああそうだ、俺は今更戦争になんか興味ねえからな、報告にもあつたらコカビエルの奴が俺のことをさんざつばらこき下ろしていたことをな?」

サーゼクスの問いかけにアザゼルは、最初からコカビエルを切り捨てる覚悟での発言であつた。

アザゼル「ああー!まどろっこしい。もういいだろ回りくどいのは無しで、とつとと和平結ぼうぜ。」

アザゼルの発言にトップ以外のみんなが驚いた。そりやそうだろう

まさか彼自身からそのような言葉が出るとは、思わなかつたからだ。

ミカエル「ええ、こちらも和平を否定はしません。神や魔王がすでにこの世におられないので。」

アザゼル「おいおい、今の発言は墮ちるせ。いやつ、そーでもねえーか。今はお前がシステムを管理してらんだつたな。」

ミカエル「ええ、微力ながら。」

サーゼクス「これ以上今の均衡が続けば、いずれ我らは三種族とも共倒れになるだろう。我々悪魔側は和平に賛成だ。」

ミカエル「我々天使側も和平に賛成します。」

アザゼル「ああそのほうがいい、神がいなくても世界は回っているんだよ。」

一誠視点

アザゼルの最後の言葉からは普段のおちやらけた感じではなく墮天使の総督としての貫禄を感じた。

アザゼル「ほんじやまこつからは世界に影響を及ぼす奴らに意見を聞くか。ヴァーリお前は どうしたい。」

ヴァーリ「俺は強いやつと戦えればそれでいい。例えばそこにいる教会最強の騎士とかな。」

ヴァーリは目線をガブリエル様の隣にいるゴルフウエアを来た顔の彫りが深い男性見て戦意を奮い立たせていた。

アザゼル「なるほどお前らしいな、そんじや赤龍帝。お前は どうしたい?。」

一誠「ええっ!?!。急に言われても何がしたいかなんてわかんないっすよ。」

アザゼル「悪いいな、でもこういった事はちゃんとはつきりしとかなんといけねえんだよ。じゃあわかりやすく教えてやる、このまま戦争でも起きたら、リアス・グレモリー

を抱けないぞ。」

一誠「!?」

アザゼルの発言はめっちゃくちゃだけど確かな事だと自分自身で納得してしまった。そしていつの間にか

一誠「和平で! 和平一択でお願いします。部長とエッチしたいです!!!。」

祐斗「一誠くん。サーゼクス様がいるんだよ。」

一誠「ハッ!?!」

木場に肩を叩かれ正気に戻った俺は、周りを見ると部長が顔を赤らめ両手で顔を隠し、サーゼクス様は小さく苦笑いをしていた。

何いつちやってるんだよ俺は!

アザゼル「そんなじゃ赤龍帝の発言はそれでいいとして、一誠「おい!」お前はどうかたい後方のアックア。」

俺の声を無視してアザゼルは、天使側の護衛をしている男性を見て質問をしていた。

アックア「私は…むっ!?!」

その時急に世界が止まった。

第6話 襲撃く俺も時止め味わったかだなあ：

一誠「あれ？俺は」

アザゼル「おつ、赤龍帝が目え覚ましたみたいだなあ取り敢えず外見てみる」

一誠はいわれるままに窓の外を見てみると結界の中に黒いローブを羽織った集団が転移してきた。

アザゼル「赤龍帝は神滅具を宿すもの、リアス・グレモリーは

赤龍帝の近くにいたから免れた聖魔剣使いとデュランダル使い、ミカエルの護衛も聖剣を出して免れたか」

ゼノヴィア「ああ、この感覚は覚えたからな後は慣れだ」

いやそれはそれですげーよ、と言いたげな一誠の視線

アザゼル「俺たちトップは言わずもがな、うちのヴァーリやその聖人も自身のオーラを外に出して免れたが、他の奴らは止まったままだがな」

アザゼルは校舎の外に向けて大量の光の槍を集団に的確に当てて消滅させていくが、また大量の魔法陣が現れて振り出しに戻ったかのようにさっきの集団が転移した。

アザゼル「チツあんまり効果はないか」

一誠「なんなんすか！あいつら!!」

アザゼル「テロだよ。いつの世にもいるんだよ平和を邪魔し、納得しないっていう連中がよ。奴らが扱う魔法は現在一般的に使われているマーリン・アンブロジウスがくみたてたものだ安く見積もっても中級悪魔並みの力を持つているぞ。それにこの現象は恐らくハーフヴァンパイアガールの神器を強制的に禁手化にしたんだろう」

リアス「っ?!ギヤスパーが!?!」

一誠「部長！旧校舎には子猫ちゃんも！」

リアス「許せないわ、会談を狙いあまつさえ私の眷属を利用するなんてこれ以上の侮辱はないわ!!」

リアスは怒りで紅のオーラを出していた

アザゼル「ちなみに外にいる護衛もみんな止められているって言ったそばから攻撃されてしまったくグレモリー眷属は未恐ろしいな」

リアス「お兄様。ギヤスパーは私の眷属。私が責任を持って連れて帰ります」

サーゼクス「構わないが、方法はあるのかい？」

リアス「私の機の引き出しに未使用の戦車の駒があります。」

サーゼクス「なるほどキヤスリングか、だが一人では危険だ」

一誠「だったら俺が行きます。ギヤスパーは俺たちの後輩で大切な仲間です。部長！」

一緒に助けに行きましょう。」

リアス「一誠……」

サーゼクス「わかった、任せるよイツセー君。グレイファイア直ぐに準備を」

グレイファイアは旧校舎への転移の準備を開始する。

アザゼル「ヴァーリ。お前は外にいるテロ共を相手にしてこい」

ヴァーリ「ハーフヴァンパイアごと旧校舎を破壊した方が手っ取り早いぞ」

一誠「っ?!?おいお前!」

ヴァーリの過激な発言に今動けるグレモリー眷属は彼を睨みつけた

アザゼル「それはダメだ、これから仲良くするっていうのにお前の行動で今後の関係

かさらに悪化するぞ」

ヴァーリ「はあ、わかったサクツと片付けてくる」

ヴァーリは会議室から飛び出し、自身の神器白龍皇の光翼を広げて

ヴァーリ「禁手化」

アルビオン《vanishing dragon balance bureik

》

ヴァーリは禁手化、白龍皇の鎧を纏い流星のごとく天を駆け、瞬く間に半分以上の敵

を殲滅していく

一誠「すげー俺とそう年も変わらないのにこうも違うのかよ」

アザゼル「いや、ただ単にайつは才能の塊みたいなもんだ」

リアス「まるでうちの一誠は才能がないように聞こえるけど」

アザゼル「ああそうだ、赤龍帝には言っちゃなんだが歴代の中でも最弱だろ、だがそれと同時に歴代の中でも可能性を秘めている赤龍帝だと俺は思っている」

一誠「褒めてんのか貶してんのかわかりにくいわ！」

グレイフィア「準備ができました、いつでもいけます」

リアス「ありがとうグレイフィア。一誠、行きましょう」

一誠「はい！部長！」

アザゼル「おい赤龍帝。これも持っていけ。」

一誠「俺の名前は兵藤一誠だ」

アザゼル「じゃあ兵藤一誠。今俺からもらった指輪の一つをハーフヴァンパイアにはめろそうすりや力を抑えられる、もう一つはお前がはめとけ対価なしで禁手化出来る」

一誠「っ!?! 本当かよ!?!」

アザゼル「ただし維持できる時間は限られてるが無いよりはマシだろ」

グレイフィア「そろそろお願いします」

サーゼクス「二人共武運を祈る。」

リアス「はい、お兄様」

一誠「行つてきます」

二人はグレイフィアが展開した転移陣で旧校舎に向かった

サーゼクス「アザゼル。グリゴリではもうそこまで神器の研究が進んでいるのかい」

アザゼル「聖書の神がもういないんだ少しでも知ってる奴がいた方がいいだろう、なんだつたら研究のデータお前らにも開示してやるよ」

サーゼクス「それともう一つ各地の神器所有者を集めていたのは何故だい、今更君が戦争を起こすとは考えにくいが」

ミカエル「それはこちらにも同意します。バニシングドラゴンを手中におさめたと知ったときは警戒しましたよ」

アザゼル「備えてたんだよ」

アザゼルの言葉に全員が？となるがすぐに！に変わる

サーゼクス「なら今外にいるテロリストが君が備えていたといつものたちか」

アザゼル「彼奴らは禍の団。「カオス・ブリゲート」その正式名称を知ったのはつい最近だ。うちの副総督シエムハザが各地で怪しげな行動を取る集団に目をつけていたんだ。調べていくうちにわかったことはそいつらが各勢力の不满分子によって構成されていることだ」

全員「っ!？」

アザゼルの言葉に一同驚愕する、もしかしたら自分達のところにもと思うと嫌な予感がしてやまない。

アザゼル「そしてそいつらのトップは、凶暴かつ凶悪で最強のドラゴンの一人」

サーゼクス「っ!?!?そうか：無限の龍神〔ウロボロス・ドラゴン〕オーフィス。神も恐れられたドラゴン。まさか彼が：」

？「そう！オーフィスこそが我らの首魁です。」

謎の女性の声とともに突如転移魔法陣が現れた。

祐斗「あれはレヴィアタンの魔法陣！いやセラフォル様とは少し違う？」

ゼノヴィア「ヴァチカンの書物で見たことがあるあれは旧レヴィアタンの魔法陣だ！」

魔法陣から転移してきたのは褐色肌に露出の多い服を着こしている女性が現れた。

？「御機嫌よう、現魔王サーゼクス殿、ならびにセラフォル殿。」

サーゼクス「先代レヴィアタンの血を引くものカテレア・レヴィアタン。これはどういうことか説明してもらおうか？」

カテレア「旧魔王派の殆どが禍の団に協力することが決定しました」

アザゼル「新旧魔王サイドも物騒になってんなあ、それにお前らは兎も角、オーフィ

スがテロリストの思惑に協調するとは思わねえなあ」

カテレア「オーフィスには力の象徴としての役を担っていただけです、その力で今一度世界を破壊してから再構築します。我々の新世界のために！」

セラフオルー「やめて！カテレアちゃん!? どうしてこんな……」

カテレア「セラフオルー……よくもぬけぬけと……わたしからレヴィアタンの座を奪い辺境の地へと追放したあなた達にもはや語る言葉はありません」

セラフオルー「カテレアちゃん……私は……」

カテレア「安心なさいセラフオルー、あなたは苦しまずに殺してあげましょう。それが少なくともかつては友であったあなたにかける最後の言葉です。」

サーゼクス「カテレア、これが最後だ、此方に来る気は無いんだな？」

カテレア「ええ、サーゼクス。あなたは良い魔王ではあったが、偉大な魔王ではなかった。」

サーゼクス「そうかい……残念だ」

サーゼクスやセラフオルーは悲しそうに目線を下に向けた。

カテレア「では始めましょうか。私の……ガア!？」

アックア「お前の相手は私である」

今まで黙って傍観していたアックアは一瞬でカテレアの前に立ち、その顔を右手で驚

掴みにし、会議室の壁をカテレアごと突き抜け空中に飛び出す。

カテレア「貴様!! 離しなさい!?! 人間風情が!!」

アツクア「では、離すのである」

アツクアは遠心力を利用して回転し一周回りながらカテレアを地面に叩きつける

カテレア「がはあつ、グハアツ!?!」

叩きつけられたカテレアは血を吐きながらも立ち上がり、自分を攻撃した人間を睨みつける

カテレア「なるほど貴方が噂の聖人」

アツクア「後方のアツクア。熾天使ガブリエル殿の護衛を務めている。貴様が今回の襲撃を企てたものならば私が止めるのは必然である。」

カテレア「随分と行ってくれますね! 聖人であろうと所詮は人間。我ら真なる魔王には敵わないということを教えてあげましょう!!」

アツクア「ならば、教えてやらねばなるまい、貴様がこれから相手するのは圧倒的な力を有する聖人であると。私を前に五体満足で帰れることはないとしれ」

ここに嫉妬の蛇と聖人の戦いが始まる。

第7話 嫉妬の蛇 vs 聖人〜今日は合の手しない

カテレア・レヴィアタンと後方のアツクアの戦いは校舎のグラウンドにて行われていたカテレア「くらいなさいっ!!」

カテレアは自身の杖から魔力弾を数発アツクアに向けて発射した。

一つでも浴びれば重傷は免れないものを

アツクア「…っ!…!。」

無言を決め脚を動かしていないのに避ける方向だけ決め高速で移動をしていた。それはまるでスケートをしているかのような動きであった

それはカテレアから見れば余裕で避け、相手を挑発してするようにしか見えない。

カテレア「っ!?!貴様!!私を侮辱してるのか!!」

アツクア「何を言っているのであるか、私は魔術を使って避けているだけである」

カテレア「魔術を……。」

カテレアはもう一度魔力弾をアツクアめがけて発射した。当然避けるアツクア。だかカテレアはよく目を凝らしてアツクアの動きを観察した。

カテレア「っ!? そういうことですか。貴方は足元に水を発生させその水の力を利用して高速で移動していると」

アックア「そういうことである。私は元々魔術にも精通している。その属性が偶々水であったこと、そして聖書にも描かれているがガブリエルは水を司る天使。相性は抜群なのである。」

そう。アックアは魔術にも精通しており水魔術を扱うのである。

といつても元々原作の後方のアックアは魔術師兼聖人でもあるので、この運命にたどり着くのは必然でもあった。

アックア「更に水魔術はこういった使い方もある」

アックアは左手を前に掲げる。すると上空に大量の水で出来た槍が高圧縮された状態で現れた。

カテレア「なっ!?!」

アックア「知っているのであるか?」

カテレア「?」

アックア「高圧で発射される水はコンクリートすら平気で穴を開けることを」

アックアは喋り終わると同時左手をはらう動作をするとまるで蛇口をおもいつきり捻り一気に吹き出す水の如くさらに高圧縮で発射されるとそれはまさに一つの兵器そ

のものであった

カテレア「っ!?く!?!」

カテレアは必死で避けるが背後にいる魔法使いたちは避けきれず次々に被弾または貫通して絶命していく

「グアアアア?!」

「ぐ!ふう?!」

「嫌だ嫌だ!!死にたくなッ?!」

次々とアツクアの放った水の槍によつてその命を散らしていく。

カテレア「おのれ!これ以上は好き勝手には、」

アツクア「余所見は禁物であるぞ」

アツクアは今度は左手を胸の前で握り拳を作ると、背後に三本の水流竜巻を発生させる。握り拳を作っていた左手をまたはらう動作をすると水流竜巻はまるで意思を持つたかのように動き、油断していたカテレアを三方向から囲み一つになる

カテレア「ぐ!ぷ!?!ッッッ!?!」

たとえ悪魔であつても水の中では無力であり、もがき苦しむカテレア

竜巻に飲み込まれたカテレアは上向きに回転しながら水流竜巻から放り出される

カテレア「ゲホッゲホッ!?貴様ああ!?!」

アックア「今度は頭上注意である」

アックアのその言葉に疑問を浮かび左手を上に掲げるアックアを気にしながら上に目線を向けると家一軒分の大きさの水球が現れた

カテレア「なっ?!」

アックア「遅い。フンツ!!」

逃げようとするカテレア。だが時すでに遅し、左手を下ろすアックア

水球はカテレアを地面に叩きつける。

カテレア「ガハアツツ!!?!」

これほどの水の圧力なのか地面はカテレアごと凹んでいた。

流れるようにそして左手の動作だけでこれほどの攻撃が出来る後方のアックアに皆改めて驚愕した。

それぞれサイド

校舎の会議室から二人の戦いに皆目を奪われていた。

祐斗「これほどの実力なのか聖人というのは！」

ゼノヴィア「ああ、噂は聞いていたが改めて彼の方には感服するほかないなあ」

イリナ「本当に私がここにいて良かったのかなあの人だけで事足りると思うんだけど」

近接だけでなく遠距離からの攻撃も出来るアックアにグレモリー眷属の騎士二人は見惚れ、違う意味で場違い感な空気を纏っているイリナであった。

アザゼル「こりやあもう決まるのは時間の問題かもな」

サーゼクス「うん。改めて彼の凄さに感銘を覚えるよ。」

ガブリエル「ええ、子供の頃からあの子のことは知っていますから」

セラフオール「…彼の力を借りれば…ブツブツ…」

サーゼクス「?セラフオールどうかしたかね?」

セラフオール「うん?あのねサーゼクスくん会談がおわった後ちよつと話があつてね、また後で話すから!」

サーゼクス「わかった。ガブリエルやミカエル。それからアザゼルも入れて話を聞こうか」

セラフオール「うん!いいよ」

三勢力のトップも彼を賞賛している中セラフオールは少し違う目線で見ていた。

これは後々の話につながるので悪しからず。

アザゼル「おつ、カテレアの奴なんてもの持ってきたんだよ」

アザゼルのその言葉に全員が目線をグラウンドに向ける。

アックアサイド

話は数分前に戻る水球を解除し地面に横たわるカテレアをアックアが見下ろしていた。

カテレア「∴私をその視線で見ろな！」

カテレアは怒りの魔力弾を杖から発射する。だがアックアは顔を少し傾けるだけで避ける。

カテレア「くぐううう!?!」

カテレアは当たらなかつたことに悔しみの意味を込め歯軋りをした。

アックア「貴様に一つ言っておく、勝負とは善悪によつてではなく強弱によつて決定するのであると」

カテレアはアックアのその言葉にこれまで以上に怒りがこみ上がった

カテレア「私がその強弱の”弱”であるといいたいのか!!」

アックア「私は聖人だ。その力の重み・使い方・覚悟を誰よりも知っている。私がその力を完全に解放すれば周囲の建物を平気で巻き込んでしまう。力は使い方次第であらゆることができるのである」

カテレア「……っ?!?フツ、フフフフツ、フハハハハハツ?!?」

カテレアは何をトチ狂ったのか何かを思いつき高笑いを始めた。

アックア「何がおかしい?機でも狂ったのであるか?」

カテレア「なに簡単なことですよ。私が強弱の”強”になれば良いということが!!」

カテレアは自分の服の懐からある小瓶を取り出した。その小瓶の蓋を開けると中からまるで瘴気を発する黒い蛇のような物がカテレアの中に入っていった。すると先程までのカテレアとは違い圧倒的に魔力量が一気に上がった

カテレア「どうですか!!これがオーフィスからいただいた蛇の力です、先程までの私とは圧倒的に違うことを今わからせてあげましょう」

カテレアは杖から魔力弾を放つその魔力弾はさつきまでとは別物かのように規模が違ったアックアは魔力弾を避けると魔力弾はグラウンドに直撃する。その直撃で地面にクレーターが出来る。さらにカテレアは連続で魔力弾を放ち続ける。

カテレア「はっはっはっはっ!!さあさあどうしました!先程までの

威勢はどこに行きました。たとえ聖人として所詮は人間!出来ることには限界という

ものがあるんですよ!!」

アックア「……………」

カテレアは今までの鬱憤を晴らすかのようにストレスを発散するかのごとくアックアに向けて魔力弾を放ち続けた。そしてアックアは魔力弾が止まるのを待ちながら何かを考えている

カテレア「貴方には考える暇すら与えません! さあ早く死になさい」

アックア(ここだ!)

カテレアが魔力弾を放つのを止めると同時にアックアは止まる

カテレア「?なにを考えているかは知りませんが、もう貴方と戦うのは飽きましたので、ここで終わらせましょう!」

カテレアは今までで一番でかい魔力弾を発射しようとした瞬間アックアがカテレアに言葉を投げかける

アックア「すまないが今度は下に注意である」

カテレア「?!? ツツツツ!」

カテレアの下から今度は水がまるでシャボン玉の形を保ちながらカテレアの顔めがけて包み込んだのだ

カテレア「ツツツツがばガバガバガボガボ?!?!」

カテレアはまた濡れかけていた。水のシャボン玉を必死に掴もうとするがそもそも水は掴めないのでもんだん視界が悪くなる一方だった。

カテレア（いつたいいつから!?!あの男は不意討ちの攻撃をしてくるから常に警戒はしていたのたとえ憂さ晴らしの攻撃をした自分でも其処だけは注意していたのになが、!?!確か奴は”下に注意”と言ったなら…）

カテレアは下を見るとそこには排水口があった

カテレア「っ!?!」

カテレアは自分の顔目掛けて魔力弾を発射した水のシャボン玉は消えたがその際に自分の顔も火傷を負っていた

カテレア「ハアハアハア：今度は自分の水魔術を排水口を通して上手く私と位置を把握しながらの不意を突いた攻撃。本当に貴方はどこまで私を侮辱する気だああ!?!」

カテレアは鬼の形相でアックアに猛スピードで突貫してくるだがアックアは自身の影から5メートルのメイスを取りだし構える

アックア「私は言つたはずだ”力は使い方次第であらゆることが出来る”と」

アックアは突貫してくるカテレアをメイスでグラウンドに叩きつけるその威力は先程までの攻撃でできたクレーターの何十倍もの大きさを誇りカテレアはその直撃に身体が耐えきれず足から徐々に消滅していく

カテレア「何故なの…オーフィスの蛇のおかげで私の力は魔王クラスにまで跳ね上がったのに…なぜ…」

カテレアは既に心も折れすぐにでもその命が尽きる。アツクアはカテレアにこの言葉を投げかける

アツクア「他人から与えられた力に頼ってる時点で貴様は魔王の未裔としてのプライドを捨てているのである。次があるなら人間にでもなってみる自分の視点が変わるはずである」

カテレア「…そうね。こんなこと言うのもなんだけど貴方に水をぶっかけまくられてすぐくムカついたわ…最後に…」

カテレアは自分の中から蛇を取り出した

カテレア「…最後までいいカテレア・レヴィアタンとして死ぬわこれ以上レヴィアタンを侮辱しては先代に怒られてしまうから…聖人。最後にセラフォルーに伝言を頼みたいのだけ…」

アツクア「わかった、言ってみろ一字一句間違えずに伝える」

カテレア「貴方のこと本当は嫌いじゃない。初めて魔王の身内じゃなく…ひとりの悪魔として…親友として見てくれて…ありがとう。」

その言葉を最後にカテレアは消滅していった。アツクアは彼女にエイメンと心の中

で発した。

それを終わると逃げようとしていた蛇を捕まえて握りつぶす。

そしてその時周りの草木やあらゆるものが動き始めた、これは恐らく例のハーフヴァンパイアの神器が解除されたのだろう

アツクア「さてとひとまず会議室に戻り：っ!？」

アツクアに向けて魔力弾が発射された無情にもそれを受けてしまう

ヴァーリ「次は俺とも戦ってくれ後方のアツクア。」

後ろから彼を攻撃したその顔は鎧越してもわかるように闘争心を表すヴァーリ

アルビオン《しーらない：もうしーらない、知らないったら！知らないから

さあー!!》

もう諦めちやった感漂う白龍皇アルビオンであった

第8話 白龍皇 v s 聖人～第2ラウンド開始である

旧校舎に囚われていたギヤスパーと小猫を救出し、リアス達は旧校舎を後にし、グラウンドに出ていた

ちようどその時ギヤスパーの神器が解除されたことで三勢力の護衛達が動き出し、トツプ達もグラウンドに集まっていた。

サーゼクス「リアス！みんなも無事かい？」

リアス「お兄様！はい一誠がギヤスパーに喝を入れてくれたようでなんとか」

サーゼクス「そうかい、一誠くんありがとう」

一誠「っ?!魔王様!?!頭あげてくださいいよ!?!俺は当然ことをしたというか〜なんていうか〜」

魔王が一下級悪魔に頭を下げたので一誠はすごく萎縮してしまった。

アザゼル「まあ取り敢えず、あつちの戦いも丁度終わつたみたいだしなあ」

アザゼルの言葉に視線を向けるとそこにはメイスをカテレアに叩きつけているアツクアがいた。そしてカテレアはアツクアに何かボソボソと何かを行って消滅していった。

セラフォルー「カテレアちゃん…」

セラフォルーはかつての親友の最後を静かに見送った。

アザゼル「さてと後は魔法使い達も一掃して…」「ドガーン!!」っ!?あのバカ!？」

突如魔力弾がアックアに放たれたその一撃は上級悪魔を軽く消せるレベルのやつであつた。その魔力弾を放った男は

アザゼル「ヴァーリ!?やっぱりか…テロリスト共を手引きしたのもスパイもお前なんだあ!？」

ヴァーリ「フハハハッ流石だよアザゼル。そうさ、俺があいつらを手引きしたんだよ」なんと禍の団をここに連れてきたのは、墮天使陣営のヴァーリだった。

だかアザゼルは本当に知らなかったようだ。

アザゼル「いつからだ、いつから奴らについた」

ヴァーリ「あの時コカピエルとフリードを送る途中にオフアーを受けてね」アース神族と戦つてみないか」とこれほどの誘ひ、のらない奴はいないよ」

アザゼル「俺は”強くなれ”とは言ったが”世界を滅ぼす要因”にはなるなど言ったよな」

ヴァーリ「関係ないね、俺は強くなればそれでいい」

ヴァーリは生粋の戦闘狂であるため戦いのためなら他者が不幸になろうとも関係な

いのだ。

ヴァーリ「そして改めて自己紹介を、俺はヴァーリ、ヴァーリ・ルシファー。」

サーゼクス「っ!?!ルシファー!?!」

ヴァーリ「俺は先代魔王の孫である父と人間の母から生まれたハーフなんだ」

ヴァーリはその証拠に背中から神器の翼ではない悪魔の羽が4対8羽の羽を広げた。

悪魔は階級によって翼が増えるので裏付けるには十分なことであった。

リアス「嘘よ…」

アザゼル「嘘じゃねえよ、悪魔と人間のハーフはよくいるがルシファーの血筋に白龍皇の神器まで持っている。俺が考えるに過去・現在・未来に於いても最強の白龍皇だろうな」

リアスは残酷な現実を受け止めきれなかったが、アザゼルが他のみんなにも聞こえるようにはっきりと伝えた。その時!?

アックア「いつまで…長話を続けているのであるか」

『っ!?!』

その一言を聞き、全員が声のする方向に目を向けるとそこには砂煙がやっと晴れ”無傷”で立っている聖人・後方のアックアの姿であった。

ヴァーリ「?おかしいな今の一撃は上級悪魔を軽く葬るほど力を込めたのだがな」
アックア「先程の魔力弾か、何を勘違いしているのか知らんがああ攻撃はわたしには当たっていないぞ。手ではたき落としたからな」

その言葉はミカエルとガブリエル以外の皆が疑問に思ったが

アックア「私の足元を見るといい」

そこに目を向けると足元に何か落ちたかのような亀裂ができていた

アザゼル「っ?!?おいおいつまりヴァーリでも見えない速さで攻撃を下に叩きつけたのか。まじかよ」

誰よりもヴァーリの実力を知っているアザゼルであったがそのヴァーリが見えなかったということは後方のアックアの実力はヴァーリよりも上であるということである。

ヴァーリ「ハハハハハッ!!最高だよ後方のアックア!お前と戦えば俺はまた一段と強くなれる!!さあこの俺と「ガシッ」っ!」

アックア「言われなくても貴様が満足するまで付き合おう。そして貴様を牢獄にぶち込むのである」

アックアはまたも皆が気づかない速度でヴァーリの顔面を掴みそのまま自分ごと地面に叩きつけた。その衝撃で地面が蜘蛛の巣状に亀裂を生む。

ヴァーリ「グヴウウツ!!」

アツクア「どうした本気を出してみろ、まだ前の白龍皇の方が骨があったぞ」

ヴァーリ「!?くらえ!」

後頭部から血を流すヴァーリは至近距離で手から魔力弾をアツクア目掛けて当てる。その衝撃でヴァーリの顔を掴んでるアツクアの手が緩みその一瞬を逃さずにヴァーリは後ろに飛び鎧を纏い空に逃げようとするが後ろにはすでにアツクアが移動して自分にメイスを叩きつけようとしていた。

ヴァーリ「くっ?!いつの間に!!」

ヴァーリは飛ぶのをやめ、腕をクロスして受け止めようとしていたがアツクアのメイスによる一撃はまたも地面に亀裂を生み、ヴァーリの両足が地面に埋まるほどだった。

ヴァーリ「これほどの力!さすがは前協会最強の悪魔祓い!!もつともつと戦おうじゃないか!!!」

アツクア「言われるまでもない」

ヴァーリ「だがもう俺はお前に触れている」*divide!*

ヴァーリの神器からその音声を聞くとアツクアの力が急に緩くなりヴァーリはその隙をつき脱出した。

アツクア「白龍皇の半減能力か…」

ヴァーリの神滅具白龍皇の光翼の能力は触れた対象の力を10秒ごとに半減させその半減させた力を自分の力にするというある意味チートな

能力である。

アックア「あの戦いから十数年、すっかり忘れていたな。確か赤龍帝は10秒ごとに倍加するのだったな」

アックアは確認のため現赤龍帝の一誠を見る。遠くから見てる一誠はアックアと視線が会いビクン!!と体を震わせビククリした。

ヴァーリ「どうだ時間が経てば経つほど力がなくなる感覚は今のお前ではそのバカでかいメイスを振るうのも難じゃないか」

アックア「そうであるな……故に今から聖人としての力を使おうと思っている」

ヴァーリ「っ!?!なに…わかっていたが奴は聖人の力を使っていなかったそうなのかアルビオン」

ヴァーリは自分の神器の白龍皇アルビオンに話しかける。

アルビオン《ああ、かつて前宿主と戦った時に発していた聖人としてのあの聖なるオーラを全く感じなかった、ヴァーリ!お前は遊ばれていたんだ!!》

ヴァーリは心から憤怒した。自分が気付かなかったことにそしてこの聖人に相手にしたらってすらいなかったことに

ヴァーリ「わかった、もうやめだ!!お前を殺し、次は現赤龍帝を殺す!!」

ヴァーリはアックアに向けて突進する、その速さまさに流星のごとく

アックア「見せてみる現白龍皇!口先だけの言葉ではない!その力に込めた理由を!!ただ無言のままに示してみせろ!!!」

アックアは体から白く神々しい聖なる光を発していたその力は最上級天使にもまさる力だ。二人が衝突する。勝ったのは!!

ヴァーリ「ガハツツ!」

アックア「フンツツ!!」

ヴァーリは圧倒的な力を前に腕でクロスしながら後ろに引きづらて続けるアックアはメイスを両手で持ち横薙ぎにヴァーリを空中に投げつける。

ヴァーリ「ツツ!!ガハツツツツ!!」

空中に投げ飛ばされたヴァーリだがなんとか急停止し、アックアを見るが目の前にはすでにいなくまたも背後に回っており、アックアは身体を横向きのままヴァーリを右手に持つメイスでまた地面に叩きつけた。聖人としての爆発的な身体能力も相まって今まで以上の蜘蛛の巣状の亀裂が発生する。砂けむりに覆われてるがすぐにアックアは地上に降りヴァーリに向かってメイスを横薙ぎに打ち払おうとするヴァーリとメイス

がぶつかかる独特の甲高い音が発生し砂けむりが晴れるとすでに鎧はぼろぼろで全身から血を流しているがそれでも腕をクロスしてメイスを防ぎ戦意は落ちていないヴァーリの姿であった。

ヴァーリ「くぐくぐっ！これが聖人の力なのか!!俺とお前ではこうも差があるのか!!!」

アツクア「どうした？怒っているのか？怒りは七つの罪の一つである

どちらかといえば貴様には憤怒よりも傲慢の方がお似合いであるぞ」

ヴァーリ「くう!!アルビオン!!なぜ奴の力を半減させない!」

アルビオン《落ち着けヴァーリお前のためだ！聖人の力を悪魔のお前が受け取ればダメージは避けられぬこれは流石に相性が悪すぎる》

ヴァーリ「ならば!!他のものを半減させればいいだけだ!!」

《half dimension》

その時この学園内のあらゆるものが徐々に小さくなっていた。

一同視点

その戦いは正に蹂躪に近かった。

最強の白龍皇・魔王ルシファアの血筋

肩書きなら圧倒的にヴァーリの方が上だか、やはり経験値・かつての偉業からなのか
二天龍の対策は完璧であった。これが後方のアックア

前教会最強の騎士の力。その力をこの場にいるもの達全てがまじまじと見つめていた、あるいは見惚れていたのだその容赦の無さに。

ミカエル「十年以上前、当時十代であった彼が二天龍を討伐したのは確かに驚きました。その力を危険視するもの達もいましたが、それでもなおアックアはその事を自慢することはありませんでした。寧ろまた新しい宿主が生まれる事を危惧してより一層己の力を鍛え、今では教会最強の騎士として、皆のためにその力を振るうのです……失礼、2番目をつけるのを忘れてました」

ガブリエル「ミカエル。あまり2番目と言わないでください、ウィリアムが一番気にしているんですから」

熾天使の二人が皆に聞こえる等にアックアの話をしていた。

一誠「ドライグ。あの人ってそんな昔から……今の俺達と同一年ぐらいの頃から強かつ

たのか？」

ドライグ《あそこまで強くはなかったが当時から最早人間を逸脱していた。当時の俺とアルビオンの宿主は暴走状態のままあの男と戦ったのだ。だが結果は当時の宿主が奴によって討伐され、奴も無傷とは行かなかった。相棒あの男とは戦わない方が身のためだぞ》

一誠「いや！いや！戦わねえよ!!今の俺じゃビンタで水切りの石みたいにぶっ飛ばされるのが目に見えてるよ!!」

裕斗「僕が教会にいた頃からいろいろな噂があの人にはあったからね最強の人間・教会最強の騎士・教会最強の悪魔祓い・現代の英雄・ドラゴンキラー・聖なる人（ホ・ハギオ

ス）。今改めてすごいと思うよそれだけの称号を一心に背負ってるって感じてる」

ゼノヴィア「私が持っているデュランダルの前任者が後方のアックアのことを賞賛していたよ。”いずれ私の後釜は彼しかいない”と正直最初はそれほど慕われていた。後方のアックアに嫉妬してしまった。

でもこうして戦いを間近で見ているとそう思っても仕方がないと納得してしまうな”アーシア「私は一度後方のアックア様を見たことがあります遠目からでしたがその身に纏う聖なるオーラはとても神々しくて、神の子と言っても過言ではありませんでし

た」

小猫「私が殴つても恐らく聞かないと思います………化け物」

ギヤスパ「こ、小猫ちゃん!! そんなこと言ったら祓われちゃうよ……!! 遠くからでもピンピンに聖のオーラを感じますう!! チクチクします……!!」

朱乃「的に回らなくてよかったと思いますね、リアス。」

リアス「ええ、改めてそう思ったわ」

グレモリー眷属組は皆各々の言葉でアックアという人間を語っていた

匙元士郎「すっげえ、最早男として憧れてちまうぜ、あの白龍皇がポロポロになつて
る。」

真羅椿姫「ええ、教会の最高戦力の一人そして敵対すれば二度と帰つてこれないとも
言われている、我々悪魔側からすれば存在自体が脅威です」

ソーナ「彼は次元が違います。そして少しでも得るものがあれば取り入れましょう」
セラフオルー・レヴィアタンの妹ソーナ・シトリーは自分の眷属・兵士の匙元士郎と
女王の真羅椿姫・そしてこの場にはいない眷属達のためにもアックアの戦いをその目に焼
き付けて見ていた。

ヴァーリ「ならば!! 他のものを半減させればいいだけだ!!」

《half dimension》

その言葉と同時に空間内のものが、校舎が、木が徐々に小さくなっていく。

一誠「おいおいなんだよこれ！今度はあいつ何したんだよ！」

アザゼル「わかりやすく説明するなら今あいつはこの場にあるものを全て半減させて自分の力にしている」

アザゼルの言葉に若い者たちは驚愕そして震えていたやはりヴァーリは恐ろしい才能を持っていることに……………だが

アザゼル「もつとわかりやすく言えばこのままだとリアス・グレモリーの胸も半分になっちまうぞ」

リアス「ちよつと／＼アザゼル!？」

アザゼルの言葉にその場にいた者達はガクツとなる。そんな言葉に反応するものなんて……………あついたわ

一誠「えつ……………ぶ、部長のおっぱいが…あのすべてを包み込んでくれる巨乳が…半分……………」

祐斗「い、一誠くん」

一誠はリアスの乳が半分になるそのアザゼルの言葉に茫然になり

一誠「ふぎっけんなあああー!!!」

《Welsh Dragon Balance Breaker》

一誠はアザゼルからもらった指輪を使い対価無しで未完成な禁手化になりながらも自分の力を倍加させヴァーリに突進していく

《boost boost boost boost boost boost》

ヴァーリ「つ!!なに!!兵藤一誠!!俺と戦う気か!!」

一誠「ゆるさねえぞヴァーリ!!部長のおっぱいを半分になんかささせるかぁー!!」
アツクア「……………なんの話であるか?」

いきなりヴァーリに突撃かました赤龍帝こと兵藤一誠がよくわからないことを言っていたのでアツクアは首を傾けてるしかなかった。

赤と白のドラゴンは先ほどの戦いに負けず劣らずの良い攻防を見せていた。そして徐々に一誠の方に軍配が上がっていった。

一誠「これは部長のおっぱいの分!

ヴァーリ「ガハッ!」

一誠「朱乃さんのおっぱいの分!」

ヴァーリ「グフウツ!?!」

一誠「これは成長途中のアーシアのおっぱいの分!!」

ヴァーリ「クウツ!?!」

一誠「ゼノヴィアのおっぱいの分!!」

ヴァーリ「グフツ!？」

一誠「そして半分にしちまったら無くなっちゃまう小猫ちゃんのロリおっぱいの分だぁー!!!」

ヴァーリ「ガハツツ?!?」

一誠の渾身のアツパーカットがヴァーリの顎に炸裂した

小猫「一誠先輩……あとで殺します……」ポキポキポキ

そして腕をポキポキならしている後輩が後ろにいた

ヴァーリ「ハハハハハツ、面白いなああの聖人に手酷くやられかけた後に格下だと思っていた兵藤一誠にもここまでやられるとはなアルビオン!今なら覇龍(ジャガーノート・ドライブ)を出してもいいと思っているのだがな」

アルビオン《待てヴァーリ、今のお前ではうまく制御できない。暴走するぞ》

ヴァーリ「関係ない!この戦いを終わらせてたまるか!!……我目覚めるは……」

アルビオン《待て!!我が力に呑まれるぞ!!!》

アルビオンの必死の形相でヴァーリを止めようとしている。ヴァーリはまだなにかをするようだった……だが

?「よっとおヴァーリ!迎えに来たぜい!」

ヴァーリ「覇の理を：美猴か、なにしに来た」

美猴「そんな不機嫌になるなよ、北のアース神族と一戦交えるから帰って来いって伝えに来たんだよっていうかなんかもう鎧がボロボロなんだがあそんなに赤龍帝って強かったのかあ」

ヴァーリ「いやこの鎧のほとんどは後方のアックアに付けられたものばかりだ。その後に進んで来た赤龍帝に付けられたものもあるがなあ」

美猴「おつ！てことはあのデッケーメイス持つてるのが噂の聖人かあ!!時間がありや戦って見たいものだなあ」

一誠「おい!!いきなり現れて一体誰だよお前!!」

地面に黒い渦が現れて出てきたのは軽装備で頭に金の輪っかをつけ、手に棒を持っている青年であった。

アゼル「闘戦勝仏の末裔、美猴。わかりやすく言うなら西遊記に出てくるクソ猿・孫悟空だよ」

一誠「そ、孫悟空うー!!??」

アゼル「まあ性格には孫悟空の力を受け継いだ猿の妖怪なんだけどなあまさか禍の団につくとは初代が泣くぜ美猴」

美猴「カッカッカ俺たちは仏になった初代と違って自由気ままに生きるのさ。そん

じゃ帰るぜい」

美猴は地面に棒・如意棒の先を叩きつけると先ほどの出てきた時に使った渦をもう一度発生させ、ヴァーリとともに地面に落ちていく。

一誠「ま、待て「ガジツ」ってのはなしてくれよ！あいつが」

アツクア「無理をするな今のお前は立つことがやつとである」

一誠「えっ？あれ急に力が！」

一誠はアツクアに止められたのち力が抜け、アツクアの左腕にもたれかかっていたアザゼル「あれだけ派手に動いてりや指輪の効果も切れちまうよ、おい！だれか手エ貸してやれ」

アーシア「は、はい！一誠さん！」

アツクア「すまないが後は頼むのである」

アーシア「はい！アツクア様」

アツクアは一誠の介抱をアーシアに頼み帰っていくヴァーリを見つめるとヴァーリもアツクアを見つめる。

ヴァーリ「俺は忙しい次はもつと強くなることだ赤龍帝いや兵藤一誠

そして後方のアツクア、俺は強くなる！必ずお前を超える！それを忘れるな」

美猴「今度会うときは俺たちとも戦ってくれよなあ」

ヴァーリと美猴、二人はこの駒王学園から撤退していった。
アックア「終わったのであるか」

三大勢力の和平を狙った禍の団の襲撃事件は幕を閉じた。

第9話 神の右席の復活くはてさてどうなることでしょう

うゝ

駒王学園のグラウンドは、もう言葉では表せないほどボロボロになっており、これがほぼ一人の人間によって起きたのだと改めて実感していた。そして三勢力がその駒王学園を力を合わせて直して言っている光景はある種の感動を与えた。

ミカエル「これでやっと和平が本格的になっていきますね」

アザゼル「ああだが、問題は山ほどあるがな」

サーゼクス「禍の団。そのトップがオフィス。そして構成員はこの世界の変革を望んでいる。これから忙しくなるね」

アザゼル「俺たち三大勢力以外の他の神話体系の陣営にも和平の協力を仰がなくちゃならねえ。そのためにもけじめはつけねえとなあ」

アザゼルはひとりで歩き出し、自分の部下の墮天使達に視線を向ける」

アザゼル「いいかオメエら!!俺たちが同盟を結んだからにはもう他の陣営に敵対はない!!もしこれがのめねえなら今すぐここから出て行け!!次会うときは敵として合間見え、容赦はしない!!それが嫌なら俺に着いてこい!!」

墮天使達「我らの命!!その全てをアザゼル総督に捧げます!!!」

アザゼル「オメエら…」

アザゼルの言葉に反対する墮天使はこの場には誰一人いなかった。これもまたアザゼルのカリスマによるものでもあると同時に部下達がアザゼルに心から忠誠を誓っている事でもある。

一誠「ミカエル様」

ミカエル「どうされましたか？兵藤一誠君」

一誠「一つお願いがあるんですが？」

ミカエル「そういえば会談の時にも言っていましたね聞きましたよ」

一誠「……………、アーシアとゼノヴィアがお祈りする時のダメージを無しにしてくれませんか。」

アーシア「っ!?!っ!?!、一誠さん!?!」

ゼノヴィア「イツセー!?!」

一誠のミカエルへの要求は二人が毎日主に捧げる祈りのさいの頭痛を無しにしてほしいというお願いであった。

ミカエル「……………」

一誠「二人とも悪魔になっても毎日毎日神様に祈りを続けているんです。コカビエル

の奴が神はもういない言ってショックを受けても、神はいないって知っていても毎日祈ってるんです！死んだ神様に祈りが届きますようにって！だからお願いします!!」

一誠の頭を下げでまでの必死のお願いにミカエルはしっかりと聞きそして顔を上げた一誠の顔をしつかりと見て優しく微笑んだ。

ミカエル「やはり貴方は、今までの赤龍帝と違い、仲間想いなのです。アーシア、ゼノヴィア、神は不在です。それでもよろしいのですか？」

アーシア「お願いします。私は主に祈りを捧げ続けます」

ゼノヴィア「わたしからもお願いしますミカエル様。例え種族が違っても関係ありませんそれに今は悪魔としての人生も楽しいです」

二人の言葉を聞いたミカエルは

ミカエル「わかりました。早速戻ってシステムに書き換えておきます。悪魔になっても懸命に祈りを捧げる元信者のためにも」

一誠「ありがとうございます！」

アーシア「ありがとうございます！よかったですねゼノヴィアさん」

ゼノヴィア「ああ!!アーシア!!」

アーシア・ゼノヴィア「主よ……っ!?!はうう!?!」

喜びのあまり祈りを捧げ頭に衝撃が走る。これも今となってはグレモリー眷属内で

は当たり前前になっっている。

ミカエル「あー…早速戻ってシステムを書き換えておきますね。イリナ、行きますよ。」

イリナ「あ、はい！」

ミカエルの護衛のイリナは最後にゼノヴィア達を見てからミカエルについて行った。そしてまたここにも種族を越えて話をしていた。

アツクア「セラフォルー・レヴィアタン殿。少し話があるのである」

セラフォルー「？なにかなく」

後方のアツクアとセラフォルー・レヴィアタンが対面して話をしていった。

アツクア「カテレア・レヴィアタンが最後に貴方にと伝言を預かっているのである」

セラフォルー「っ!!聞かせて」

普段のおちやらけた顔ではなく一人の魔王として真剣にアツクアの言葉を待っていた。

アツクア『貴方のこと本当は嫌いじゃない。初めて魔王の身内じゃなく、ひとりの悪魔として、親友として見てくれてありがとう』これで全てである」

セラフォルー「カテレアちゃん…私もずっとずっと大好きだよ…初めて出来た友達なんだから…こんな別れなんてあんまりだよ」

セラフオルーはすすり泣いた。アツクアはそれを静かに見守った。

数分後セラフオルーは泣き止みいつもの調子を取り戻した。

セラフオルー「えへへっありがとね！カテレアちゃんの言葉。これからも私の励みになるわ。ありがと後方のアツクア君」

アツクア「気にかすることはないのである。私もそろそろガブリエル様の護衛としてイタリアに帰るのである」

セラフオルー「あー！そうだちよつと待ってて、ガブリエルちゃん!!ちよつと話があるんだけど」

ガブリエル「どうしましたセラフオルー」

セラフオルー「あのねえゴニヨゴニヨ…」

アツクアはセラフオルーとガブリエルの二人の話をあまり聞こうとしなかった。何か嫌な予感がするので。

和平会談が終わって数日が経った。日本で言う夏休みに入るまでいろいろなことが

起きた。

墮天使総督であるアザゼルが駒王学園の教師兼オカルト研究部の顧問になったことや禍の団対策を世界各地の神話体系と共に協議しあい和平に賛成してくれるように三大勢力の使者をそれぞれの神話に赴かせるなど大忙しであった。

だがそれと同時に三大勢力には身から出た錆のことわざのようにある問題を抱えている。

墮天使側は白龍皇アルビオンを宿すヴァーリ・ルシファーが禍の団に加わること。

悪魔側は旧魔王派の悪魔が禍の団に所属する

と言ったような放置・野放しにしていた事が原因なのか未だに他の神話体系は首を縦に降るような行動を起こさないでいた。

墮天使陣営・悪魔陣営と一緒に天界陣営からも離反者が出た

教会の戦士・または悪魔祓いたちの反乱である。

長年、人に害をなす化け物を退治してきた教会側としては熾天使の言葉としても納得できない事柄であった。教会の戦士たちはその約半数ほどが悪魔・吸血鬼に人生を滅茶苦茶にされたものがほとんどであり復讐のために所属しているものもいるため声を大にして言えなかったのであり熾天使トップのミカエルもどう動けばいいのか悩んでいた。

だがこの問題に最初の一声を熾天使にかけたのがローマ教皇であった
”このままではいけません！今こそあの部隊の復活を”と

神の右席の復活をと

熾天使たちは驚いたまさかローマ教皇が五年前に解散した部隊をもう一度復活させるなどだがミカエルは落ち着きながら説明をローマ教皇に求めた。

ローマ教皇「今のままでは協会内部まで影響を及ぼし、独断専行するものが後をたたなくなりません。故にその抑止力が必要なのです。かつて大きな功績を挙げた神の右席にもう一度再復活させる許可を願います。もしまた問題が起きればわたしは今の地位を返上し、ただの隠居ジジイに戻ります。」

熾天使たち『……………』

熾天使たちはローマ教皇が本当の意味で覚悟を持っている事がわかりミカエルが代表し、

ミカエル「わかりました。マタイ・リース。貴方の覚悟、しかと受け止めました。今ここに最高殲滅部隊”神の右席”の再結成を現天界代表ミカエルが宣言します。」

ガブリエル「同じくガブリエルも賛成します」

ウリエル「久しぶりにヴェントに連絡してみるか、同じくウリエルも

賛成する」

ラファエル「テツラはクセが強いからなあ、ラファエルも賛成だ」

ローマ教皇「ありがとうございます。」

今ここに神の右席が復活したことは瞬く間に教会全体から世界中に知れ渡った。

？「神の右席復活かー！すごいじゃん！ウイリアム様！」

アツクア「ただ復活しただけで何故こうもはしゃぐのであるか。貴様も落ち着け」

ジャンヌ」

この少女はジャンヌ・ダルク。正確にはジャンヌ・ダルクの魂を受け継いだ少女である。かつてオルレアン騎士団殲滅戦においてアツクアが助けた少女であり、更に創造系神器「聖劍創造」を無意識に開放していた状態で発見し、発見した当初は感情が無く”はい”か”うん”しか言わなかったがアツクアが親身にそばにつきなんとか今の彼女がいるのである。

ジャンヌ「えー！でもさあーあの神の右席だよ！神の右席！！それぞれの宗派から兵器並みの実力者4人からなる最高戦力の部隊！！。あたしとしては、またウイリアム様が神の右席としての活躍が観れてうれしんだよー」

アツクア「……ここまで陽気になるとは思わなかったである」ボソ

ジャンヌ「なんかいったー？」

アツクア「いや、なんでもない」

ジャンヌ「ところでさーウィリアム様。いつ復活するのー？」

アツクア「八月の終わり頃、つまり9月頭から私を含めて4人がこのサン・ピエトロ大聖堂のあの立ち入り禁止の部屋で集まることになっている」

ジャンヌ「立ち入り禁止？あーなんか警察とかが使っている黄色い仕切りしているあの部屋？」

アツクア「そうだ。5年前まであそこの部屋を定例会議用の部屋として使っていたのである」

ジャンヌ「…五年前に何があったの？噂じゃ何かやらかして解散したって聞いたんだけど…」

そう神の右席は五年前に突然解散したのだ。当時教会の希望であった神の右席。だがその真実を知っているのは、神の右席のメンバーと纏め役であったローマ教皇・さらには熾天使達だけである。

心配そうにアツクアを見るジャンヌにアツクアはそつと頭を撫でた。

アツクア「今は言えぬがいたら時が来たら教えるつもりだ。心配することはないのである」

ジャンヌ「もーくすぐったいよーウィリアム様。わかった、じゃあその時が来たらちやんと教えてね」

アツクアとジャンヌは久しぶりの時間を楽しんでいた。その時部屋のドアを叩く音が聞こえアツクアはどうぞと尋ね人を部屋に通した。

ガブリエル「ウィリアム会谈ぶりですね。ジャンヌも久しぶりです」

アツクア「ガブリエル様」

ジャンヌ「ガ！ガブリエル様!?!」

ジャンヌは突然のガブリエルの登場に慌てながら膝をつき礼をする。

アツクアは慣れた様子で礼をする。その順応力にジャンヌは羨ましがる。

ガブリエル「突然ですが貴方達に魔王セラフォル・レヴィアタンから頼みがあるそうです」

アツクア「魔王から直々に願いとは何なんであるか」

ジャンヌ「えー！なんかすごいドキドキするんだけど」

ガブリエル「冥界に来て欲しいそうです。使いのものはこちらから出すそうです」

アックア・ジャンヌ「………………。は？」

時間は夏休み前半ここは冥界にあるシトリー領。

セラフオール「と言うわけで今日からソーナちゃんや眷属のみんなの指導者兼アドバイザーを引き受けてくれる。ウィリアム・オルウェル君こと後方のアックア君だよー！。その隣にいるのわ付き人のジャンヌ・ダルクことジャンヌちゃん!!。はいみんなー拍手！拍手ー!!」

セラフオールは一人で拍手をしているがアックア以外のみんな心境はこうなっている。

セラフオール・アックア以外（いや待て待て！どう言うこと!!誰か説明してー！ー！!?!?)

アツクア
(嫌な予感の中である)

第10話 シトリー眷属指導中々人に何かを教えるのは

苦手

セラフォル・レヴィアタンの発表に真っ先に反応したのは妹のソーナであった。

ソーナ「ちよつと待ってくださいお姉様！私はそんなこと一度も聞いていませんよ！！」

セラフォル「うん☆言っていないよー！皆んなをビックリさせよう思ったんだけどー思っていた以上に皆んなシーンとしてたからサプライズ失敗しちゃったかと思ったよー☆」

いやこの状況についていけないんだよ…アックア以外のみんなが心の中で愚痴っていた。

匙元士郎「あのー魔王様。質問いいですか」

セラフォル「はい！ソーナちゃんの兵士くんどうぞ☆」

匙「単に疑問なんですけど、和平が結ばれてすぐにこんな早く天界側の人達と関わり持っていいんですか？しかも後方のアックアって教会の最高戦力の一人って聞いたことありますし、しかも会談にもいましたし」

椿姫「私も匙に賛成です。未だに和平に難色を示している貴族悪魔はかなりいますし昨日今日と仲良くはできません。ここは徐々にしていったほうがいいのでは」

匙の意見と真羅の意見は当たらず共遠からずであり和平にどういった解釈をつければわからずにいる。

セラフォル「ううん。こういったのは思いつ切って堂々とする方がいいと私は思うの。確かに貴族の悪魔たちは自分たちこそ至高だとかいつもくつちやべってるけど、そうやって同じこと繰り返しているんだよね私達って。だから!! ☆ここは思い切って異文化交流みたいにくつちから迎えてあげるほうが好感触をそそるでしょう」

アックア「それを本人の前で言っても本末転倒である」

シトリー眷属『はあ……………』

セラフォル「あはは……………大丈夫!! 今回の話は四大熾天使のガブリエルちゃんからもお願いされてるから」

ソーナ「えっ?! そうなのですか!?!」

セラフォル「うん! そうだよ」 「今後私達三大勢力を中心に神話勢力の方々にも和平に賛成を通せるように実績を作る必要があります。その為にもウイリアムにはソーナ嬢やその眷属達のアドバイザー兼指導者として未来ある若手の悪魔の指導に打って付けだと思ふのです。そんなわけでうちのウイリアムとジャンヌをよろしくです。教

えるのは上手いほうなので」って、私も快く受け入れちゃって☆それに丁度若手悪魔の会合で若手同士でレーティングゲームを行うし、そこで二人にアドバイザー兼指導者として我がシトリー家も歓迎してるの！」

ソーナ「お姉様、若手同士の会合があるのは知っていますが若手同士のレーティングゲームがあるのは聞いてません。ネタバレしないでください。それにシトリー家も歓迎すると言いましたがお父様やお母様はこの事を知っているんですか。いくらお姉様の一存では……」

セラフオルー「だーい丈夫☆パパやママにはもう伝えてあるし許可ももらってるよー☆ほらあそこ」

セラフオルーが指がある方向に向けるとその先の木の近くに黒髪の男女が同時に親指をグー！と立てていつでもウェルカムと仕草で表しているシトリー卿シトリー夫人であつた。

ソーナ「なんでそんな時だけ対応早いですか!!!」

セラフオルー「サプライズ大成功ー！イエイ！イエイ！」パンパン

セラフオルーは一瞬で両親の元に行きハイタッチをしていた。

ソーナ「ですが私は私なりに訓練内容を考えて来たんです。今更それを変えるというのは、ああ！いえ！別に後方のアックア様達を否定しているのではなくて」

もちろんソーナは自分で考えた訓練通りに修行するつもりでいたがそれでも自分たちのために来てくれた二人を蔑ろにするわけにもいかず困っていた。

アツクア「いやそれでいい。貴殿が考えた内容で修行をすれば良い」

ソーナ「…よろしいのでしょうか…」

アツクア「あくまでも此方はアドバイスをしていこうと考えている。それと出来れば後で訓練内容を見せてもらってもいいのであるか。基本はそちらの訓練を少し見させてもらうが構わないであるか？」

ソーナ「いえ、それでしたら構いません。すみません出過ぎた真似をしまして」

アツクア「いや、自分の意見をしっかりと伝えるものは心が強い証拠である。その心を忘れずにいれば良い」

なんだかいつの間にか教師と生徒みたいな雰囲気醸し出していた。

セラフオルー「それじゃあ私は魔王なので先に魔王領ルシファードに行ってくるから。その間少し時間が空いているから親睦でも深めててねー。それじゃー！」

セラフオルーは転移魔法を使いルシファードに向かった。

ついでに両親もいつの間にかいなくなっていた。

ソーナ「それでは改めて自己紹介を。私はソーナ・シトリー。シトリー家の次期当主

です。少しの間ですがよろしくお願いします」

椿姫「私は真羅椿姫。ソーナ会長の女王を務めています」

翼沙「由良翼沙。戦車を担当してます」

巴柄「巡巴柄です。シトリー眷属の騎士です」

桃「私は花戒桃です。僧侶でみんなを援護します」

憐耶「草下憐耶。同じく僧侶を担当しています」

留流子「仁村留流子です。兵士をしています」

匙「匙元士郎です！同じく兵士やっていますよろしくお願いします」

ソーナ「私を含めた総勢8人で現在のソーナ・シトリー眷属です。短い間ですがよろしくお願いします！」

シトリー眷属『よろしくお願いします!!』

決して上級悪魔であろうと相手を下に見ず、決して悪魔になったことに優越感を感じず、常に努力を重ねている証拠を肌で感じた。

アックア「後方のアックア。20日までという短い時間で私が出れることは限られているが出来るだけ尽力するつもりである」

ジャンヌ「はいはい！私はジャンヌ。一応ジャンヌ・ダルクの魂を受け継いでるんだけどそう言ったの気にしないで普通に接してくれると助かるんだけどよろしくねー

！

アツクアは律儀にジャンヌは馴れ馴れしくも自分をアピールして自己紹介をする。

そこからはアツクアがソーナの訓練内容を聞き改善点を少し与え、空いた時間に模擬戦を入れ、本当の強者と対峙した時の有効な作戦を立案するなどと会合までのほんのわずかな時間をいっぱい使った。

一方ジャンヌはシトリー眷属の女性陣と早くに打ち解けメール交換したり、ちよつと腐女子的な会話に盛り上がるのだった。

ちなみに匙はその会話についていけずソーナの隣に気配を消して居座った。

ソーナ達シトリー眷属が魔王領ルシファードに行きアツクアとジャンヌは其々の用意してもらった部屋に行き、それぞれ時間を潰していた。と言ってもアツクアの部屋に数分でジャンヌが来て「飽きた。ウィリアム様、ちよつと話そう」つとドアを開けながら言ってきた。

アツクア「こちらは日課の聖書を読んでいるのだから少し待っているのである」

ジャンヌ「うん…わかった」

そこから数分が過ぎ

パタン

アックア「さて、話とはなんであるかジャンヌ」

ジャンヌ「ウイリアム様が使ってる魔術ってなんなの？魔法使い達が使っている魔法とは違うような気がするんだけど」

アックア「よく今になってその質問をしてきたのであるな。何年も共にいるから逆にいつ聞くのかと思っていたのであるが……」

ジャンヌ「私もほんと今更この質問したと思ってるよ」

アックア「まあいい、とりあえず教えておくがこれは私もある者から聞いた話であるから少し違うと思うが。私が扱う魔術の起源は才能のない人が才能のある人に追いつくために生まれた技術だと私は聞いている」

ジャンヌ「才能ねー、と言うことは神の右席のメンバーはみんな使えるの？」

アックア「神の右席は神の代行。故に熾天使と同等の地位が与えられるため通常の一般的な魔術は使えないが神・又は天使クラスの魔術を扱えるのである。私は聖母崇拜の術式を使い、通常の聖人よりも聖人の力を100%行使することが出来る二重聖人。そもそも私が作った聖母の慈悲はあらゆる約束・束縛・魔術的は効果を緩める能力を持っている」

アックア「話を戻すが、魔法と魔術は性質は似ているが大きく違う。魔法使いは悪魔

や魔力を持った存在と契約してその魔力を自分自身の力にして力を行使する存在。魔術師は自らの生命エネルギーを魔力に変換し力を行使する。使い勝手に言えば魔法使いの方が多く、逆に魔術師のことを知っている方が少ない」

ジャンヌ「ふーん成る程、じゃあ！私も魔術つて使えるのかな」

アツクア「そんなアルバイト感覚ですぐ出来る者ではない。しっかりと修練すれば出来ると思えるがそれと魔術師になるなら魔法名をきちんと考えておくことである」

ジャンヌ「魔法名？」

アツクア「魔法名はラテン単語と3桁の数字をその魂に刻み込み己の信念を固めた者であり、魔術師は魔法名を名乗ることで 自らの覚悟の表れとも言える」

そのあとはシトリー夫妻と共に世間話をしたり今後どうするかを考えあっていた。

数時間後若手悪魔の会合を終えシトリー眷属達がシトリー家の屋敷に戻ってきたがその顔色は皆あまり良い者ではなかった。

聞くところによるとソーナ・シトリーは冥界にレーティングゲームを身分関係なく誰でも学ぶことが出来る学校を建てるのが夢でありそのことを話すと上役の貴族悪魔は皆バカにするかのように大爆笑、中には笑い過ぎてお腹を痛むものもいたとかいない

とか。

やれ妄想だとか、それは無理だとか、などとソーナの夢を否定しており、旧家の顔に泥を塗る行為だという始末。はつきり言ってしまえば

今まで見下してきた存在が同じ場所にいるのが気に食わないという何千年も染み付いてきた至上主義者故の感想であり、誰も若手悪魔の夢に関しては誰も心から応援するものはいないのである。

しかし同時にバカでもある。上役の悪魔達は誰の身内をバカにしているのかとそれをセラフオルーに追及するまで気付かずましてや子供の言い訳のように反論するところはもはや哀れである。

最後はサーゼクス・ルシファーがなんとか取り持ちここはお互いにレーティングゲームでお互いの覚悟を示してみてもと、そこで若手悪魔のレーティングゲームでのトーナメントが決まり、リアス・グレモリーとソーナ・シトリーが最初に戦うこととなったのだ。

アックア「成る程、まさか初戦がリアス・グレモリーの眷属とはな開催は人間界の日時で8月20日」

ソーナ「……そのアックア先生は私の夢をどう思いますか」

アックア「はつきり言うならば難しいであるな。勿論応援はするがその悪魔達にとつては面白くないと思うかもしれない。そういった連中は自分の思い通りにいかないのは納得いかないと、あらゆる手を尽くして邪魔をするだろう例え純潔悪魔であろうとだ」

ソーナ「そうですね上役達からしたら私の夢は所詮言葉の通り夢物語。リアス達も会合終わりに応援してくれるそうですが、現実がこれほど厳しいと改めて痛感しました」

アックア「だが、それで諦める理由にはならないだろう」

ソーナ「ええ、寧ろ見返してやりますよ。20日のレーティングゲームで私たちの覚悟を!!ですよねみんな」

シトリー眷属達『はい!!!会長!!!』

アックア「どうやら覚悟は最初から決まっているようであるな」

ジャンヌ「そうだねー色々ぐちぐちバカにされる事も、こりやグレモリー眷属相手にいい結果残せそうかも」

匙「残せそうじゃダメっす!!勝つ気で行かないと!!」

ジャンヌ「あはは!ゴメンゴメン。そんじや早速どうするかを決めよっか」

ソーナ「一応私が調べた限りのリアス達のことをここにまとめています。どうぞ」

アックアはソーナから資料を借り、グレモリー眷属の経歴覧を見ている

アックア「グレモリー眷属は所謂パワータイプだな一撃で戦況をひっくり返すだけの力を持っている。だが未だに自分の力と向き合えていないものもいる。主人の勝利よりも自分の力を隠すことに感情が向いている。これはこちらの方が有利であるな」

匙「いやそれってちよつと卑怯な気が…」

アックア「卑怯・汚いは敗者の戯言である。戦場では勝った方が正義で負けた方が悪、これが戦場の常識であるが、まあ私のやり方をお前達に強要するつもりはない。それと訓練にはジャンヌを相手にしてやれ、彼女は聖剣創造くブレード・ブラックスミス＞の所有者である。グレモリーの騎士木場裕斗の魔剣創造くソード・バース＞の対になる神器である。グレモリーの騎士二人は聖魔剣とデュランダル、悪魔にダメージを与える武器を持っている。そこでジャンヌと戦い実際にどう優位に立つかを考えてるといいのである」

ジャンヌ「そんなじゃあ早速明日から訓練ってことでいいソーナちゃん」

ソーナ「はい。今日は明日に向けて早く寝ましょう。今の時間帯は人間界ではもう寝る時間ですので」

ソーナの言葉でみんなそれぞれ部屋に戻り寝る準備や明日に向けての準備を開始していた。

匙「あの…アックア先生」

アツクア「?どうかしたであるか匙元士郎」

匙「俺会談であなたの戦いを見ていたんですが、格闘技もやってるんですか?」

アツクア「一応使えるものは使う主義であるからな。教えて欲しいのか」

匙「はい!俺少しでも会長の力になりたいんです!それに個人的に兵藤と戦いたいです!グレモリー眷属の赤龍帝をシトリー眷属の龍王が倒す!そんな下克上をして上役達を見返したいんです!!お願いします!!」

アツクア「……………わかった。20日まででどこまで覚えられるかこちらも腕がなる。一つ言っておくが私が教える技はは頭も使う複雑な格闘術だ。根を上げればすぐに辞めるつもりである」

匙「はいっ!!よろしくお願いします!!」

アツクア「フツ……………ところでいつのまにかアツクア先生となったのであるか?」

匙「あー、会合前にどう呼ぶかみんな考えてアツクア先生になりました。これからよろしくお願いしますアツクア先生!」

アツクア「先生か……………いい気分であるな」